
戦争と剣

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争と剣

【Nコード】

N3900E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

平和な国に戦争が起こった。兵隊召集をかけられたが逃げ出した少年の目標は戦争を終結させることだった。だが、それを決意するには一番の苦悩を乗り越え、老人の助言が必要だった。

プロローグ

ラグナ暦三千年。この世界は平和とされていた。

世界にある街にはしっかりと食料も整い、誰一人、不幸な生活を送っている者などいないともされていた。

しかし、そんなある日のこと。ある国の東側と西側の戦闘が始まってしまった。

これにより、男子は出兵することとなり、女子が働かなければいけないという生活となり、食料は戦争で使われるため、裕福な平和な生活ではなくなってしまった。

そして、ここライトタウンでも出兵の召集が来ていた。

「さあ、出兵をする。この町にいる男子は全員集まれ！」

兵隊召集へとやってきた、大人の男が大きな声で言った。

男子はしぶしぶと外へ出てくる者と東軍のためにがんばるぞと意気込みを持った者の二手に分かれていた。

そんな中。一人の少年だけは家に閉じこもっているままだった。

「誰が兵隊召集なんかに行くもんか！」

「宮治！　なんてことを言うのです！　東軍側のためにあなたは力を尽くさないといけないのです！」

宮治と呼ばれるその少年は、兵隊召集に行くことを拒んでいた。

母親とけんかをしてまでも行く気はないという。

そんな時。兵隊召集の者が宮治の家に訪れた。どうやら、男の声を聞いて訪ねてきたようだ。

「おい！　早くこい！」

「嫌だね！」

「こら宮治！　とつと行きなさい！」

「早くこい！」

「嫌だつたら嫌だね！　誰が兵隊なんかななるもんか！」

「なんだと！　このガキ！　こつちに来い！」

兵隊召集のための男は、宮治を捕まえようとした。すると、宮治は部屋に置いてあった剣を取り出した。

「ほお、剣を使うか。ならば私が勝てばきさまを連れて行く！」

「うるせえ！ 俺は絶対兵隊なんかにならねえ！」

兵隊召集の男も剣を取り出し、宮治と剣で勝負をした。

だが、その勝負は一瞬で決まってしまった。

宮治のすばやい攻撃で、兵隊召集の男は防具を装備しているにもかかわらず倒れてしまったのである。

「俺にかなうわけがないんだよ！」

「宮治！ なんてことを……」

「大丈夫だ。致命傷には至らしていない。母さん。俺はこの町を出る」

「なんだって！？ 兵隊になれっでいてるでしょ！」

「俺は兵隊なんかになりたくない。絶対にな！」

宮治はそう言うのと、家を飛び出し、町の裏口から出て行き、町を後にした。

それから、宮治は、ソードシティという街に行くことにした。

宮治の特技は剣術だ。ソードシティは剣術の達人とも言われる街であるため、戦争中にもかかわらず剣の腕を磨こうというのだ。

ライトタウンからソードシティまでの距離はたいしてないため、一時間ほどで到着した。だが、宮治はそれを見て失望した。

ソードシティを歩いていて見るものは女のみ。男の姿はまったくないのだ。

そればかりは、宮治もしょうがないと諦めが付いた。戦争が起きているのだから、男はほとんどいないことは承知しているからである。

宮治が失望したもの。それは、店においてある品物だ。

ソードシティには剣がたくさん売っているということでも有名だった。だが、剣屋を見ると剣など一本もないのである。

確かに、剣は戦争で使われるからなくなっていることぐらいは承知

だったが、まったく予想していないことだった。
「まじかよ……」

失望した宮治は、街の郊外へと向かった。

街の郊外に剣屋や道場があるかもしれないと考えたのだ。

郊外に着くと、そこには岩山がそびえていた。山といってもたいして大きくはない。どちらかといえば小さながけのしたのような感じだ。

その岩山の下に一つの洞窟があった。

急に出ていたものだから、泊まる場所がない。お金も持ってこなかった。宿にも泊まらない状況の宮治は、その洞窟で一晩を過ごすため、洞窟に入った。

洞窟はそれほど広くはなかったが、途中で左に曲がるところがある。そこならば、入り口からの風もしのぐことができる。

角を曲がると、宮治は驚いた。

そこには、一人の老人がすでにいたのだ。年齢は七十代のよぼよぼの老人である。

「誰じゃ？」

宮治は自分のこと。自分の状況や紹介などを老人に教えた。

「なるほどな。ならいいだろう。今晚はここで泊まるがよい」

「ありがとうございます」

「ところでおぬしは剣術を学ぶためにこの街に来たのかね？」

「はい。でも、あまり見込みはなさそうです」

「じゃろうな。なにやら、男共はみな女を残しどこかに行ってしまったんじゃないかな」

宮治はその言葉を聞き、老人が今戦争が起こっていることを知らないのだろうか？　ということ考えた。

念のため、宮治は今戦争が起こっていることを老人に話した。

「そうじゃったのか……。今戦争が」

「はい。それで、兵隊召集から僕は逃げているんです」

「おぬしも大変じゃのう。そうじゃ。わしは、それでも剣術の道場

を開いていたんじゃ。おぬしにそれを教えてやろうかの？」

「いいんですか？」

「いいとも。せっかくこの街に来たんじゃからな」

宮治はそれから老人に剣術を学び始めた。練習は、洞窟を出た岩山の前でしていた。

こうして、宮治は剣術を老人から、一週間ほど学んだのである。

「うむ。なかなかうまくなったな」

「ありがとうございます」

「これでおぬしは基本の剣術は学んだ。後は自分で剣術を磨くがよい」

「はい」

すると、岩山前に突然、馬に乗った兵士がこちらに向かってきた。宮治たちはそれをじっと見ていると、その兵士は宮治たちの所で馬から下りた。

「兵隊召集だ。とつと私と一緒に来い。そっちの老いばれはいい」

「嫌だね！ 俺は兵隊なんかにならない！」

「このガキが。ならば力ずくでもきさまを兵隊としてやろう」

兵隊召集に来た男は馬から下りて剣を取り出した。

「俺に剣で勝てると思ってるのか？」

「きさまのようなガキなんかに負けるわけがなかるう」

「言ってくれるぜ。後で泣いたってしらねえからな」

「それはこっちのセリフだ」

そう言つと、二人は走り出した。互いの剣をまじあわせるのである。

「とりゃ！ くらえ！」

宮治は、押し切り、剣を横に振った。だが、それは相手にはかすつたぐらいだった。

「防具をしている私には勝てんわ！ くらえ！」

兵士は宮治に切りかかった。だが、宮治はそれを間一髪でかわした。

「それはこっちのセリフだぜ。ここからが本当の勝負だ！」
こうして、彼らの戦いは続くのである。一体、どちらに勝利の女神が微笑むのか。

第01話 「最初の悲しみ」

ラグナ暦三千年。この世界は平和とされていた。

世界にある街にはしっかりと食料も整い、誰一人、不幸な生活を送っている者などいないともされていた。

しかし、そんなある日のこと。ある国の東側と西側の戦闘が始まってしまった。

これにより、男子は出兵することとなり、女子が働かなければいけないという生活となり、食料は戦争で使われるため、裕福な平和な生活ではなくなってしまった。

そして、ここライトタウンでも出兵の召集が来ていた。

「さあ、出兵をする。この町にいる男子は全員集まれ！」

兵隊召集へとやってきた、大人の男が大きな声で言った。

男子はしぶしぶと外へ出てくる者と東軍のためにがんばるぞと意気込みを持った者の二手に分かれていた。

そんな中。一人の少年だけは家に閉じこもっているままだった。

「誰が兵隊召集なんかに行くもんか！」

「宮治！　なんてことを言うのです！　東軍側のためにあなたは力を尽くさないといけないのです！」

宮治と呼ばれるその少年は、兵隊召集に行くことを拒んでいた。

母親とけんかをしてまでも行く気はないという。

そんな時。兵隊召集の者が宮治の家に訪れた。どうやら、男の声を聞いて訪ねてきたようだ。

「おい！　早くこい！」

「嫌だね！」

「こら宮治！　とつと行きなさい！」

「早くこい！」

「嫌だつたら嫌だね！　誰が兵隊なんかなるもんか！」

「なんだと！　このガキ！　こっちに来い！」

兵隊召集のための男は、宮治を捕まえようとした。すると、宮治は部屋に置いてあった剣を取り出した。

「ほお、剣を使うか。ならば私が勝てばきさまを連れて行く！」

「うるせえ！ 俺は絶対兵隊なんかにならねえ！」

兵隊召集の男も剣を取り出し、宮治と剣で勝負をした。

だが、その勝負は一瞬で決まってしまった。

宮治のすばやい攻撃で、兵隊召集の男は防具を装備しているにもかかわらず倒れてしまったのである。

「俺にかなうわけがないんだよ！」

「宮治！ なんてことを……」

「大丈夫だ。致命傷には至らしていない。母さん。俺はこの町を出る」

「なんだって！？ 兵隊になれっでいてるでしょ！」

「俺は兵隊なんかになりたくない。絶対にな！」

宮治はそう言うと、家を飛び出し、町の裏口から出て行き、町を後にした。

それから、宮治は、ソードシティという街に行くことにした。

宮治の特技は剣術だ。ソードシティは剣術の達人とも言われる街であるため、戦争中にもかかわらず剣の腕を磨こうというのだ。

ライトタウンからソードシティまでの距離はたいしてないため、一時間ほどで到着した。だが、宮治はそれを見て失望した。

ソードシティを歩いていて見るものは女のみ。男の姿はまったくないのだ。

そればかりは、宮治もしょうがないと諦めが付いた。戦争が起きているのだから、男はほとんどいないことは承知しているからである。

宮治が失望したもの。それは、店においてある品物だ。

ソードシティには剣がたくさん売っているということでも有名だった。だが、剣屋を見ると剣など一本もないのである。

確かに、剣は戦争で使われるからなくなっていることぐらいは承知

だったが、まったくいいことはまったく予想していないことだった。
「まじかよ……」

失望した宮治は、街の郊外へと向かった。

街の郊外に剣屋や道場があるかもしれないと考えたのだ。

郊外に着くと、そこには岩山がそびえていた。山といってもたいして大きくはない。どちらかといえば小さながけのしたのような感じだ。

その岩山の下に一つの洞窟があった。

急に出ていたものだから、泊まる場所がない。お金も持ってこなかった。宿にも泊まらない状況の宮治は、その洞窟で一晩を過ごすため、洞窟に入った。

洞窟はそれほど広くはなかったが、途中で左に曲がるところがある。そこならば、入り口からの風もしのぐことができる。

角を曲がると、宮治は驚いた。

そこには、一人の老人がすでにいたのだ。年齢は七十代のよぼよぼの老人である。

「誰じゃ？」

宮治は自分のこと。自分の状況や紹介などを老人に教えた。

「なるほどな。ならいいだろう。今晚はここで泊まるがよい」

「ありがとうございます」

「ところでおぬしは剣術を学ぶためにこの街に来たのかね？」

「はい。でも、あまり見込みはなさそうです」

「じゃろうな。なにやら、男共はみな女を残しどこかに行ってしまったんじゃないかな」

宮治はその言葉を聞き、老人が今戦争が起こっていることを知らないのだろうか？　ということ考えた。

念のため、宮治は今戦争が起こっていることを老人に話した。

「そうじゃったのか……。今戦争が」

「はい。それで、兵隊召集から僕は逃げているんです」

「おぬしも大変じゃのう。そうじゃ。わしは、それでも剣術の道場

を開いていたんじゃ。おぬしにそれを教えてやろうかの？」

「いいんですか？」

「いいとも。せっかくこの街に来たんじゃからな」

宮治はそれから老人に剣術を学び始めた。練習は、洞窟を出た岩山の前でしていた。

こうして、宮治は剣術を老人から、一週間ほど学んだのである。

「うむ。なかなかうまくなったな」

「ありがとうございます」

「これでおぬしは基本の剣術は学んだ。後は自分で剣術を磨くがよい」

「はい」

すると、岩山前に突然、馬に乗った兵士がこちらに向かってきた。宮治たちはそれをじっと見ていると、その兵士は宮治たちの所で馬から下りた。

「兵隊召集だ。とつと私と一緒に来い。そっちの老いばれはいい」

「嫌だね！ 俺は兵隊なんかにならない！」

「このガキが。ならば力ずくでもきさまを兵隊としてやろう」

兵隊召集に来た男は馬から下りて剣を取り出した。

「俺に剣で勝てると思ってるのか？」

「きさまのようなガキなんかに負けるわけがなかるう」

「言ってくれるぜ。後で泣いたってしらねえからな」

「それはこっちのセリフだ」

そう言つと、二人は走り出した。互いの剣をまじあわせるのである。

「とりや！ くらえ！」

宮治は、押し切り、剣を横に振った。だが、それは相手にはかすつたぐらいだった。

「防具をしている私には勝てんわ！ くらえ！」

兵士は宮治に切りかかった。だが、宮治はそれを間一髪でかわした。

「それはこっちのセリフだぜ。ここからが本当の勝負だ！」

こうして、彼らの戦いは続くのである。一体、どちらに勝利の女神が微笑むのか。

「こいつでもくらえ！」

宮治はななめに切りかかるようにした。だが、それを相手はかわした。

「そんなのはきかねえ！」

「へん！ まだまだだ！」

二人はお互いの力を出しながら、切りかかろうとしている。

だが、二人の力はほぼ互角で、どちらが勝ってもおかしくないような状況であった。

その状況が数十分立った時だった。すると突然、相手の兵士が言い始めた始めた。

「お前、ライトタウンの人間か？」

「なぜそれを！？」

「俺はライトタウンで召集をしてからこっちのあまりものを探し召集に来たのさ。その時、ライトタウンで脱走があったときいいいな、もしかしたらお前かと思ってな」

「くっ、追っ手か！」

「おいおい冗談はよせよ。一人や二人逃げられたからってこまらねえ。そんな奴を捕まえるんだったら別の奴を捕まえるさ」

「だったらどうして」

「そんなことはどうでもいいだろ。それよりお前にいい知らせがある」

「いい知らせだと？」

「そうだ。脱走した奴の母親は死んだんだぜ」

「なんだって！？」

そのときだった、兵士は宮治の心が動揺したその瞬間を狙い、切りかかった。

宮治はそれにとっさに対応したが、ほぼ遅く、太ももから血が流れ

出してきた。

「くっ」

「さあこれで終わりだ。とつと私と来るんだな」

兵士は攻撃をやめ、兵隊になるように再度言い始めた。

「それよりも、母さんが死んだって言うのは本当なのか……？」

「本当さ。お前は脱走し、召集に来た兵士を倒した。それが問題となり、お前の母親を罪を問われ即刻殺されたのさ」

「なんてことを……」

「さあ、それより早く行くぞ！」

兵士はそう言うのと宮治を持ち上げた。そして、馬に寄せようとした時だった。

「バカいつてんじゃねえ。俺は絶対兵士なんかにはならねえ！」

宮治はそう言うど持っていた剣で兵士の足を切った。

「ぐわっ」

兵士はその痛み耐え切れず、宮治を持っていた手を離してしまった。それにより、宮治は自由となった。

「これで終わりだ。さあ、お前こそ早くどこかに行つてしまえ！」

「おのれ……！ このかりはいつか返してやる！」

兵士はそう言うど怪我した足をかばいながら馬に乗り、そのままどこかに行つてしまった。

「ふう。もう、大丈夫だ。痛」

宮治は一件落着したと思つたとき、足に痛みがはつた。さつき切りかかられたときにおつた傷である。

「なかなかじゃったな。ほれ、少し足を貸してみい」

老人は宮治に近づき足に布を巻き、傷口を防いだ。

「ありがとうございます。それじゃあ、俺は行きます。町に戻らなければ」

「母親が本当にそのようなことになつていないといいな」

「はい。それじゃあ、急ぐので」

「ちよつと待ちたまえ。確認が終つたらもう一度ここに来てくれ

ないかね」

「もう一度？」

「そうじゃ。どうか、よろしく頼む」

「わかりました」

宮治は老人と約束をかわし、故郷のライトタウンへと急いで戻るのだった。

だが、急いで戻るといっても、足に怪我を負っているため、そう早くは行くことができなかった。

そのため、行きにかかった時間より、三十分ほど余分にかかり、ライトタウンへと到着した。

ライトタウンに戻ってきた宮治はその光景に絶望した。

あの美しい町並みと木々はもろくも崩れ去り、まるで、巨大なハリケーンが通過していったような状態だった。

宮治は絶望をしてしまったが、母の安否が気になり、急いで自分の家へと向かった。

だが、そこまで行くのは容易ではなかった。だが、何とかたどり着いた。

しかし、そこで宮治は更なる絶望にさらされた。

家があつた場所には、崩れたがれきがあるだけで、元の家の原型はとどめていなかった。

宮治は必死になり、がれきをどかし始めた。あの兵士が言ったことが本当なら逃げ場がなくがれきの下に埋まっていると思つたからだ。そのがれきをどかす作業で怪我を再度負いながらも、必死にがれきをどかし続けた。だが、宮治一人だけでは、到底一人の人物を探すことは不可能である。

宮治自身もそれを承知していた。だが、その不可能を可能としようとし、必死で探し回った。

それから、数時間がたったころ、宮治はある一つのペンダントを発見した。

「これは母さんのペンダントじゃないか！」

そのペンダントは宮治の母が、宮治の父と結婚した際の結婚指輪の代わりとして、もらった、いわば結婚ペンダントなのである。

宮治はそれを見つけたあたりのがれきを必死にどかした。そして、ついに発見したのである。

「母さん！」

宮治の母は、血色が悪くなっており、息もなかった。それがすぐにわかった宮治だったが、母をずっと揺らした。

「母さん！ 母さん！」

だが、それは当たり前のように無駄だった。すでに息を引き取っているものが揺らしただけで到底息をふきかえすなど考えられないことなのだ。

宮治はそれがわかっていた。だが、それでも必死に揺らした。

そして、ついに宮治は母をあきらめた。そう、受け止めたくない現実を受け止めたのだ。

宮治はそれから、父が眠っている町外れの墓場まで母を連れて行った。

墓場は、土に墓石があるだけのため、土を掘ればすぐに母を埋めることができた。

宮治は悲しみながら。そして、母に最後の別れを告げながら埋葬した。

それから、宮治は墓石の前で泣き叫んだ。

母は自分が逃げたから殺された。自分さえ逃げなければ母は死なずにすんだ。そういう罪悪感もあった。

そして、宮治がふと気が付くとあたりは一面真っ暗になっていた。町は雲に覆われ、光など差していなかったため、一段と暗くなっていた。さらに、雨までも降ってきた。

まるで、宮治の悲しみにおいうちをかけるように……。

「宮治いいのよ。あなたのせいではないわ。あなたは好きな道を行きなさい」

すると、宮治は母の言葉を聞いた。宮治はそれを聞いた瞬間、あ

たりを見回した。

だが、当然母は埋まっているのだから、あたりにいるわけはなかった。

「母さん……」

宮治はそれを聞き、涙でぬれた目を拭いた。

そして、東軍を絶対に倒すということを胸に決めた。母をこのようなことをした東軍が許せないのだ。

宮治はライトタウン南東にある東軍の首都である、イーストシティへと向かうことにした。

そう決心し、イーストシティに向かおうとしたとき、宮治はふとあの老人が言った『確認が終わったらもう一度ここに来てくれないかね』という言葉を思い出した。

宮治はイーストシティに早く行きたかった。だが、老人との約束を捨てることはできない。

とりあえず、宮治は、母の仇を討つのは後にしソードシティの老人のところへ戻るのだった。

第02話 「古代の戦争」

母を失った悲しみにくれながらも宮治はソードシティの老人がいた洞窟まで戻った。

洞窟の前には老人はおらず最初にここに来た時と同じように洞窟の奥まで入るとそこに老人はいた。

「おう、帰ってきたか。どうじゃったか？」

宮治はそう聞かれたがなにも言わなかった。それを見た老人は状況を察した。

「そうか……。はったりじゃなかったということじゃな……」

「俺……。俺……」

宮治は重たい口を開いた。今の自分の心境。母を失った悲しみ。東軍への怒りを老人に伝えたのだ。

それを聞いた老人は言った。

「おぬし、古代の戦争について知っておるかの？」

宮治は首を横に振った。

「そうか。なら話してやろう。昔々。今から、何千年と前のことじゃ。その時代は作物が非常に豊かで貧しい生活を送っている者などいなかった。そんな、平和な日々が続いている時、戦争が勃発した。その戦争により平和は乱れ、平和という文字はなくなった。

そんな中。ある一人の少年とその友人達とが三本の剣を持ち、戦争を終結するために旅に出たという。その中の一人の少年は肉親を失い殺した軍を憎んだが、友人達に慰められ、戦争をとめるということ考えたという。そして、その少年達はついに戦争を終結させたという。

そのときに使っていた剣は戦争をとめた剣とされある神殿に安置されたという」

宮治はその話しに耳を傾けていた。最初はどうでもいいと思いつながら聞いていたが、後になってくるとその話に興味がわいてきた。

だが、その話しが今の宮治が受け開けた状況と関係がないのに気づき、宮治は言った。

「それがどうしたというのです？」

「気が付かんか。まあよい。今はそのような気持ちではないのだろう。これから、東軍を倒しに行くというだな？」

「はい……。母さんをあんなふうにしてしまったのは俺のせいですが、東軍も母さんをあのようにしたんだ。絶対に許せない！」

「少し頭を冷やしていくといい。今日はここに泊まりたまえ」

「いいです。俺はイーストシティに行かなければ」

「まあ落ち着け。少しやすまんと体がもたんぞ」

老人はそう言い宮治をなだめ、彼をこの場に泊ませることに成功した。

その夜。老人は先ほどの昔話を宮治に聞かせてから眠らせた。

宮治は寝るときに老人の話を思い出していた。東軍を早く倒したいという気持ちがあるにもかかわらず、老人の話を聞くとどうしてか一時的に和む。それがどうしてかわからなかった。

宮治はその答えを探し出したいと思いながら、眠りつくのであった。

次の日。宮治がおきると老人はすでにおきていた。

「おお、おきたか。ちょうどおこしに来たところじゃ。どうじゃ？ 目覚めは？」

「悪くないです」

「そうか。それはよかったな。さあ、朝飯でも食べよう。外へ出たまえ」

「あの！」

老人が外に朝食を食べるため洞窟の外に行こうとしたときをそれを宮治が止めた。

「なんじゃ？」

「あなたが昨日してくれた話。あれは実話なんですか？」

「さあな。何しろ言い伝えじゃからそれはわからん」

「そうですか……」

「それがどうかしたのかね？」

「昨日寝るときに考えていたんです。あなたが話してくれた話。あれは俺のことをあらわしていたんじゃないですか？」

「……」

「肉親を軍に殺された。この肉親は俺の場合母さん。そして、憎んでいるのは俺。どう考えても俺と一致しています。あなたはもしかして、俺に戦争を止めるように仕向けていたんじゃないですか？」

「……。そうじゃ。古代の戦争でのこの話。この話と一致しているのが現代じゃ。平和な時から戦争におきる。まさに現代と同じじゃ。話の中で戦争をとめたのは、肉親を殺され軍を憎んだ少年。まさしく、君と同じだ。その君なら今の戦争をとめることができるのではないかと思ったのだ」

「やはりそうでしたか……。俺は不思議だった。あなたが話したそれを聞いたら心が和む。これは俺と同じだったということからだっただんですね。俺……決めました。あなたの言うその話を信じます。俺戦争を止めてみせます！そして、俺のように親を……大切な人をなくした悲しみを受ける人を少なくするために！」

「よく言ってくれたな。わしもそれを望んでいたのじゃ。さあ、まずは朝食を食べよう」

二人は朝食を取った。そして、朝食後に老人は宮治に赤い燃えるような剣を宮治に差し出した。

「おぬしにこれをやろう」

「この剣を？」

「ああ。ただし、やるといってもおぬしの剣と交換じゃがな」

「俺の剣とその剣を？ その剣はこの剣と価値が違うんじゃないですか？」

「気にせんでよい。さあ、交換するのか？ 交換しないのか？」

宮治はその剣をじっくりと見た。すると、赤い剣はとても赤々とした色が宮治の心を奮るわせた。

そして宮治は言った。

「わかりました。この剣と交換しましょう」

宮治は鞘から剣を取り出し老人に渡した。老人はそれを受け取る
と宮治に赤い剣を渡した。

「がんばりたまえよ。この戦争を終結させてくれたまえ」

「はい！」

「ここから北北西に向かうとランドタウンという町がある。まずは
そこに行くといい。何かしらの情報があるかもしれない。それ
から、決して修行を怠るんじゃないぞ」

「わかりました。いろいろとお世話になりました。お元気で」

「おぬしもな」

宮治はソードシティ郊外の岩山を立ち去り、次の町として、ラン
ドタウンへと向かうのであった。

こうして、宮治の戦争をとめる旅が始まったのであった。

第03話 「新たな出会い」

「つかれたぁ……。いい加減休みたいぜ……」

ソードシティを去り次の目的地であるランドタウンに向かっていった宮路。

だが、ソードシティからランドタウンへ行くには、ランド山を越えないといけないため、宮治は山登りをしていた。

宮治は体力には自身があつた。剣術は体力を使うものでもあるし、ランニングもしていたからだ。

だが、ランド山は道がゴツゴツしており、普段の山登りより体力を使う道ばかりだったため、ばてばての状態の宮治だった。

そんな状態でも登山をしていた宮治だったがついに日がくれあたりはそろそろ暗くなり始めていた。

宮治はその様子を見て、今晚はこの山で野宿することを決意し、野宿できそうな場所を探し始めた。

だが、なかなかいい野宿をする場所はなく、結局、見つける前に日が沈んでしまった。

「仕方ない。多少悪くても寝れそうな場所だったさっきの場所まで戻るか……。おや？ あれはなんだ？」

宮治があきらめて道を戻ろうとしたとき、一筋の光が宮治の目に飛び込んできた。

その光はぼうぼうとゆれており、赤い光だった。それを見た宮治はその光が照る場所に近づいていった。

その場所は洞窟で、中には人が三人いた。二人は男。一人は女。男の片方は背がもう片方より小さかった。どうやら、親子のようだ。「すいません」

宮治が洞窟内に入りそう言った。すると、父親と思われる男は鞘から剣を取り出した。

「きさま兵隊召集に来た奴だな！ ここまで追ってくるとはしつこ

「いやつめ！」

「待て待て！ 俺は兵隊召集に来た奴じゃない！」

「問答無用！ そんなことを言って私たちを連れて行く気だろう！
ここで倒してやる！」

男はそう言うのと宮治に走って近づききりかかってきた。

宮治はそれを回避するのではなく、自分も剣を取り出しその攻撃を防いだ。

「本当だつて！ 俺は兵隊召集になんか来ていない！ それに俺だつて召集される側の人間だ！」

宮治がそう言うのと男は怒ったような表情から申し訳なさそうな表情に変わりながら、剣を鞘にしまった。

「なんと……。では、あなたも兵隊召集に追われているのですか？」

「追われてるかは知らないけど……。追われる身であるのは確かだ」

「それはなんと手荒いことをしてしまったことか……。少し中に入っていただけですか？ いえ、ささやかですがお詫びを」

男はそう言うのと宮治を洞窟内に招いた。そして、そこで水を一杯と焼いたジャガイモを一個くれた。

「ありがとうございます」

「ところであなたも兵隊召集から逃げているようですが一体どうしてここに？」

「ランドタウンに行こうと思って。ソードシティから来たんです」

「ランドタウンへ？ とんでもない！ 私たちはランドタウンから逃げてきているんですよ！」

「ランドタウンから？ じゃあ、ランドタウンにも兵隊召集が？」

「ええ。そして私たちともここで隠れ住んでいるのです」

そう言ったのは始めて言葉を口にした紅一点の女性である。

「そうでしたか……。じゃあ、ランドタウンに行っても何もなければなあ」

「ランドタウンに何のようがおりなのですか？」

「いや、特に用があるわけじゃないんですが、この戦争をとめるた

めのヒントがあるかもしれないと思いましたので」

「戦争をとめる？」

そう言ったのは二人の子供であると見られる少年だ。

「ああ。俺はこの戦争を終結させるための旅をしているんだ。まあ、旅といってもまだ数日しかたつてないけどな」

「すごいや！ 戦争をとめるために旅をするなんて！」

「そうか？ まあ、自分で言うのも変だけどすごいことなのかな。死と常に隣り合わせになりそうだし」

「なるほど。あなたは勇敢な方ですな。ですが、ランドタウンにはそのようなヒントなどないと思いますぞ」

「まあ、とりあえず行くだけ行くつもりです」

「そうですか。ところで、今晚は泊まるところがおありですか？」

「いえ。今のところ決定はしていませんが、とりあえず場所は決めています」

「ならばここに泊まりなさい。あなたが入っても私たちは不自由しませんので」

「いいんですか？ ならお言葉に甘えて」

「どうぞどうぞ。たいしたものありませんが。あ、申し遅れました。私は空下来夏。家内は空下美鶴と申します。そして……」

「俺は川原宮治です」

自己紹介を済ますと空下家の人に剣の練習をしてくと告げて宮治は外へと出た。

次の日の朝。宮治は早く起きた。あたりを見回すとそこにはあの少年だけがいなかった。

宮治は彼を探すため洞窟の外へ出た。すると、どこから音が聞こえてきたため、宮治はその音のするほうへと向かって行った。

すると、そこではあの少年がなにやら呪文を唱え木に攻撃をしていた。

「朝からすごいことやっているな」

宮治はそう言っただけの前に現れた。彼は少し驚いたような顔をしていたが、すぐにもとの表情に戻した。

「うん。毎朝やってるんだ。僕の術が衰えないように」

「そうだったのか。そう言えば君の名前は聞いていなかったね。なんて言うんだい？」

「僕は空下風紋って言っただ」

「ふうもん？　すごい名前だな」

「でしょ？　僕もそう思うんだ。でも、この名前が嫌じゃないよ。ところで今日はもう行っちゃうの？」

「まだ行かないぜ。風紋の両親に挨拶をしてから行くつもりさ」

「そう……。がんばってね」

「ああ。風紋もがんばれよ」

洞窟に戻ると来夏と美鶴はおきていた。宮治は出て行くことを告げると、朝食だけでも取っていけと言われたため、それに再度甘え、朝食を取った。

朝食をとると、宮治は最後の挨拶をいい、洞窟を後にしていった。「……」

その姿を見ていた風紋はとても悲しそうな目をしていた。それを見た来夏は風紋に言った。

「風紋。お前も行きたいのか？」

「うん……。僕だって戦争をとめるための術があれば行きたい。でも、僕の術はまだ未熟だしそれに怖い……」

「お前は努力はしているのだからいずれかは強い術を身につけるだろう。だが、お前がそれを身につけてもその恐さを取り払わねばいつまでたっても戦争をとめる旅などできないだろう。」

ならばその度胸をつけるために彼についていてもいいのだぞ。術などは旅をしているうちに強くなるだろう」

「父さん……」

「父さんは風紋一人で行かせるより彼のような人と一緒に行ってくれたほうが安心できる。行きたいと思うならば行けばいい」

「そうよ。行きたいなら行きなさい。このままでは心残りとなってしまうよ」

「母さんも……。わかった。僕は行ってくる！　そして絶対にこの戦争をとめて見せるよ！」

「ああ。父さんも母さんも期待しているぞ。旅が終わったらここに来なさい」

「うん！　じゃあ行ってくるね！」

「がんばれよ！」

風紋は宮治が歩いていった道を走っていった。

その姿を見ている風紋の両親は少し悲しげな顔をしていた。

「風紋を見守ってあげましよう。風紋が無事に戦争をとめることができ、ここに帰ってくることを」

「そうだな……。彼のような勇敢な青年がいるんだ。風紋も大丈夫だろう」

その頃宮治はランド山の頂上にたどり着いていた。

「お！　あれがランドタウンかな？」

頂上から見える小さな町。あれがランドタウンのようだ。

どうやら、ランドタウンは町が崩壊しているように見える。

「ライトタウンの二の舞か……。とりあえず生存者探してもしなとな」

「宮治君！」

宮治が下山を始めようとしたその時、後ろから声が聞こえたので後ろを振り返った。すると、そこには風紋が走っていた。

「どうしたんだ風紋？」

「お願いがあるんだ。僕を君の旅に同行させてくれないか？」

「え？　いいけど、両親はどうするんだ？」

「ちゃんと話しはつけてきたよ」

「……。風紋。これは遊びじゃないことはわかってるな。この旅は死と隣り合わせになる旅になると思う。それは覚悟してるんだな？」

「うん。それぐらいはわかってるよ。僕は戦争をとめるために術を

学んだんだ。その術を使う時でもあるし。僕は度胸もつけないといけないんだ」

宮治は風紋の目を見た。風紋の目には恐怖というものが少し見えたが、それ以上に期待と戦争をとめるという考えの方がよく見えた。「わかった。一緒に旅をしよう」

「ありがとう、宮治君」

「宮治でいいよ。さあ、行こうぜ！」

「うん！」

宮治は新たな仲間『風紋』を加え、ランドタウンへと向かうのだった。

第04話 「ランドタウンの悲劇」

新しい仲間『風紋』を旅に加えた宮治は、ランドタウンへと到着した。

ランドタウンはランド山から見たように崩壊しており、男も見当たらなかった。

「こりゃひどいな」

「うん……。この様子じゃ僕の家もダメだろうな……」

「とりあえず風紋の家に行くだけ行ってみようぜ」

宮治は風紋の案内で、風紋宅を訪れた。そこはやはりがれきの山となっていた。

風紋はその現状を受け止めたくないのか早くその場から立ち去りたいといってきたので宮路はすぐに場所を変えた。

風紋のその気持ちを宮治は理解していたからでもある。宮治自身も家がなくなり母も失ってしまったているのだから。

彼らはランドタウンの中心部にあった噴水広場へと足を運んだ。

「じゃあ、ここから他の人の手助けをしてあげよう」

「うん」

宮治と風紋は周りで大変そうな人たちから優先的に作業を手伝ってあげた。

時にはがれきをどかし、時にはお年寄りの手助けをしたりと忙しい時をすごした。

それから数時間たつと二人は噴水広場で休憩を取っていた。

「ふう、結構疲れたな」

宮治が言った。

「うん……。でも、まだまだ残ってるんだ。がんばろう宮治」

「ああ。ん？」

宮治が少し遠くを見ると、誰かが馬に乗ってこちらへと十人ほど向かってきている。

鎧をまとして、腰には鞘がある。

「まさか……。おい、風紋。あれ」

宮治は風紋にそれを伝えた。

「もしかしてあれは……。みんな！ 急いで隠れて！」

風紋は大声で言った。その声に最初は戸惑っていたランドタウンの民だったが、風紋が何回か言ったことによりちゃんと隠れてくれた。

そして、宮治と風紋も隠れた。

「やっぱりあいつらは……」

「うん。西軍の兵士達だよ。たぶん、この状況には西軍がやったんだろうけどもう一度確認のために戻ってきたんだろ。男子がいな
いことをいいことに攻め込んできたんだろうね」

「西軍？ 東軍じゃないのか？」

「あれは西軍だよ。あの鎧の腕の部分に西軍の印がついているもの。
あ！ やってきた。宮治、静かにあいつらの様子を探ろう」

西軍の十人の兵士達は先ほどまで宮治たちが休んでいた噴水広場
へと入ってきた。

そこで馬をとめてあたりを見回した。

「誰もいないようですね」

兵士の一人が言った。

「ああ。しかし変だな。このあたりにほかに街などない。逃げるこ
となどできるはずはないのだが」

「全員がれきの下敷きになってしまったんじゃないですかい？」

「それはない。最初に来た時に生存者がいたはずだ。そいつらを始
末するために戻ってきたのだからな。おい、ちゃんとそこらへんを
調べろ」

兵士の一人がそう言うのと他の兵士はあたりを調べ始めた。

これでは隠れている民がすぐに見つかってしまう。そう思った風
紋は思い切って姿を西軍の十人の兵士たちの前に現した。

それに続き宮治を姿をあらわした。

「おい、男がいるぜ」

「まじかよ。東軍の奴らも馬鹿だな」

「この町を壊したのはお前らだな？」

風紋が聞いた。すると、先ほどから指示を出していた兵士が言った。

「そうだ。それがどうしたというのだ？　きさまらには関係ないことだろう」

「なに！」

「おい！　こいつらをやっちまうぞ！」

首領と思われる兵士がそう言っていると、全員馬から下りてきた。

そして、剣を取り出して構えた。

それに応じて宮治を剣を取り出した。風紋は術を使う準備をしているのだ。

「かかれ！」

その一言に兵士達は一斉に攻撃をしてきた。

宮治は一人一人をできる限り行動できなくなる程度の攻撃を続けた。

いちいち一人を倒すより動けなくし相手の力を弱めさせようというのだ。

だが、一人対九人ではそれをするのも難しい。それどころか、かわすので精一杯の部分もあった。

しかし、それをサポートしたのが風紋だった。

風紋はその術を使い二人から三人を一気に攻撃した。

「ウインドノヴァー！」

風紋はそう言う光の如くわざを使う。それは、目に見えない速さで見えるのはその輝かしい光だけだ。

風の上に星が乗って移動しているようなわざである。

宮治はその援護によりほとんど兵士を倒すことができた。

ウインドノヴァーのおかげで、相手はそれに集中しているため宮治の存在を忘れがちになっているため、宮治に対する隙が多いのだ。

そして、数十分で兵士九人を倒し指揮官のような兵士だけが残った。

「むう……。なんという実力だ……」

「さあ、お前で最後だ」

宮治は剣で指揮官兵士を指した。

「いいだろう。私が相手になってやる」

そう言つと馬から降りてきて、剣を出した。

「行くぞ！」

指揮官兵士は切り込んできた。

宮治はそれを剣で防ぎ身を守った。

「それだけか」

「なに！」

宮治は思いつきり剣を押し返し、指揮官兵士を地面に倒させた。

そして、宮治は剣を倒れている指揮官兵士に突き出した。

「くっ」

「これでお前の終わりだ。たいしたことがないな。おい、風紋。こいつはどうする？」

「えっ？」

風紋の声の調子が変わっていることを宮治は感じた。

さっきまでは強気の姿勢だったが、今はランド山であったときと同じような調子だった。

「えっ？　じゃないぜ。こいつはどうするんだよ？」

「どうするっていつても……。かわいそうだから、逃がしてあげたら？」

「そんなんでいいのかよ？」

「いいよ。その人が反省しているならね」

宮治は指揮官兵士を見た。すると、死を覚悟している様子だった。

「お前……生き残りたいか？」

「ああ……。だが、もう死んでもよい。きさまなどに頭を下げるぐらいならな」

「そうか」

宮治はそう言うのと剣をしまった。

そして、兵士にどこかに行くように言った。

「さあ早く行け！」

「ちっ、覚えてろよ」

指揮官兵士は馬に飛び乗りさっそうと去っていった。

そして、一息つき風紋と一緒にランドタウンの民にもう大丈夫だということ伝えた。

それからまだ終わっていない作業を再開した。

そうするしていると一日がすぎた。まだまだ作業が残ってはいたが、次なる目的地に行かねば行けないので二人はランドタウンを後にするのを民に言った。

「がんばってください。あなた方の成功をお祈りしています」

民のほとんどがそのような意味を持った言葉を言い、二人の成功を祈った。

そんな民が言葉を言っている時に一人の老婆が二人の目の前に現れ話し始めた。

「おぬし達戦争をとめる旅をしているんじゃないかな？」

「ええ。そうですよ」

「もしか伝説の剣についてはご存知かね？」

「伝説の剣？」

「ああ、それなら知っていますよ。昔の戦争をとめた人たちが使っていたといわれる剣のことですね」

「そうじゃ。よく知ってるな。なら話しは早い。戦争をとめるならばその剣を探すといい」

「でも、その剣がどこにあるかなんて……」

「場所なら知つとる。おぬし達はハイブリッド神殿を知っているかね？」

「ハイブリッド神殿は知りません」

「宮治。僕は知ってるよ。ここから南西に行ったところにある神殿

だよ」

「そうじゃ。そこに安置されているといわれている。そこに行くんだよ」

「わかりました。そこに行ってみることにします」

「うむ、がんばってな」

こうして二人はランドタウンを後にした。

そして、伝説の剣が安置されているというハイブリッド神殿に向けて旅立つのであった。

第05話 「愛する者の存在」

「なあ、ハイブリッド神殿まではどれくらい時間がかかるんだ？」

宮治が風紋に聞いた。

ランドタウンを出発して、ハイブリッド神殿を目指している宮治たち。出発前に老婆から聞いたハイブリッド神殿を目指して旅することになったのだが、肝心の神殿の場所やどれくらいの距離があるかどうかまでは宮治は知らなかった。

「それはわからないけど、ハイブリッド神殿っていうのは”ガレアタウン”の近くにあるんだ。ガレアタウンからハイブリッド神殿に行くには、フレア洞窟ってところを通らなきゃいけないんだけどね」

「ふーん。じゃあ、そのガレアタウンまではどれくらいなんだ？」

「え？ それもわからないけど……。今いる場所からそこまでいくには、フラッシュシティに行って、ガイアマウンテンを越えればいけるよ」

「そうか。フラッシュシティなら知ってる。ライトタウンから南西に行ったところにある街だからな」

フラッシュシティにやってきた宮治と風紋。

フラッシュシティは光り輝く電気街であることで有名で、眠らない街としても有名だ。

だが、今はその面影がまったくなかった。光などまったくなく、金属類は錆びてしまっている。そして、この街にも男の姿はない。「こりゃひどいな」

その光景を見た宮治はそう思った。以前来たことがあった宮治にはそれがすぐわかった。

そう思いながらも、かねて相談していた食料調達をすることになった。

もともと、宮治も風紋も急に旅にすることになったから食料などあまり持っていないのだ。

ランドタウンで集めようと思えば集められたが、厳しい状況を強いられているランドタウンから食料集めなどすることは外道である。

食料調達をしていた宮治と風紋。いろんな店を回り食料を調達していたが、ある店で出会ったしまった。

「おい！ こいつは全部もらっていく」

馬に乗った騎士たちは、店に並んでいる食料を全部力ゴの中に入れた。

「ああ、お待ちください！ それを持っていかれたら商売になりません！」

「うるさい！ 我が軍の勝利に貢献しないというのか！ ならばきさまは首吊りだぞ！ ん？ おい、そこのお前らこつちを向いてみる」

その男は店内にいた宮治と風紋を見ながら言った。彼らは騎士たちに背中を見せていたため、顔はまだ見られていない。

だが、状況的に顔を見せなければいけなくなつたため、二人は騎士たちに顔をさらけ出した。

「きさまら、男だな？ ここでなにをしている？」

「食料調達だ」

「食料調達だと？ 我が軍のものか？ いや、その姿からして軍のものじゃないな？」

「そうさ、軍なんかに入っていない」

「ならばこちらにこい！ 軍に入れてやろっ」

「嫌だね！ 風紋！」

「うん！」

風紋は術を使い、騎士たちをその場から少しばかり吹き飛ばした。そして、宮治は馬の足に切りかかった。

それにより馬は暴れだした。その際に宮治と風紋はその店から逃

げ出した。

「成功だね。宮治」

「ああ。だけど、まだ完全に成功じゃないな」

宮治は指を後ろへ向けた。それを見た風紋が後ろを向くとそこには馬を乗り捨てた騎士たちがこちらへ向かって走っている。

「しつこい奴らだね」

「ほんとだよ」

宮治たちはとある軒の部分で曲がった。すると、ちょうど軒と軒の間に隠れそうな場所を見つけたので二人はそこに隠れた。

そこに入り込んできた騎士たちはそのまま、その場所に気づかずどこかへ行ってしまった。

あたりが静かになるまで待つてから、二人はその場から出た。

「ふう、撒いたな」

「うん」

「あなた達なにしてるの？」

撒いたと思った二人に話しかけてきた人物がいた。声は女の声だったためそれほど驚きはしなかったが、刹那、追っ手が来たかと思った。

その声の主の招待は隠れていた場所の片方の家の人物だった。髪はショートで、年齢は子供。たいていの人はその子をかわいいというだろう。

「え？ ああ、ちょっと追っ手がいたから撒いたんだ」

「追っ手？ 今の騎士たちのこと？」

「そうだよ」

「なら落ち着くまでこの家にいるといいわ。どうぞ、入って」

その子は彼ら二人を家の中に招き入れた。そして、イスに座ると彼女はお茶を持ってきた。

「悪いね。かくまってもらって」

宮治が言った。

「いいえ。ところで、騎士たちに追われていたってことは兵隊召集

から逃げ出しているの?」

「まあ、そんなところかな」

「……………。どうして?」

「え?」

「どうして兵隊召集から逃げるの? 兵隊召集に逆らったら殺されるのよ」

「どうしてって言われてもなあ」

「だね…………。これは兵隊召集から逃げている理由になるかわからないけど」

と、風紋が話し始めた。

「僕たちは、この戦争をとめるために旅をしているんだ」

「戦争をとめる旅?」

「うん。この世界でこうしている間にもいろんな人が死んでいつている。そんな犠牲者を少しでも減らすため僕たちは旅しているんだ」
「そして、ここに来たのはハイブリッド神殿というところに行くためなのさ」

それを聞いた彼女は少し沈黙を続けた。そして、こう言った。

「恐くないの? 戦争をとめるなんてことをするなら自分達が傷つくこともあるのよ? 兵隊召集より危険なことよ」

「恐いさ。こんなことをするのに恐くないやつなんていないと思う。でも、俺は母さんのためにも、俺みたいな犠牲者を増やさないためにも戦争をとめるって決心したんだ!」

それを聞いた彼女は目を大きく開いた。どうやら、その宮治の決心に驚いているようだ。

「…………。ねえ、私もその旅に同行させてくれないかしら?」

「え? でも、危険な旅だよ? 自分でもそのことはわかってるんじゃない?」

「わかっていきますとも。でも、私もその旅に行きたいの。私には愛する彼がいるわ。彼は優しく人を殺せるような人じゃない。でも、そんな彼も今は兵隊になっちゃって、安否がわからない。私は

そんな中不安なの。彼が生きて帰ってきてくれるかって……

だから、彼が醜い目に会わない前に戦争をとめることができれば再会できると思うの」

「……。本当に危険な旅だぜ？」

「わかってるわ。彼が危険な目にあっているのに私だけあっていないなんて変ですもの」

「わかった。君を連れて行こう」

「宮治！」

「この子もいろんな決意があるんだ。意見を尊重してあげたい。ところで君の名前は？」

「私は、林彩音。回復わざとかの魔術を得意としてるわ」

「術師なの？」

風紋が聞いた。すると、彩音はうなずいた。

「僕も術師なんだ。回復わざはつかえないけど……」

「そうなの……。じゃあ、私が回復術を使ってあなたは攻撃術を使えばいいわね」

「うん。あ、僕は空下風紋っていうんだ。よろしく」

「俺は川原宮治だ」

「二人ともよろしく」

「よし！　じゃあ、ガイアマウンテンに行こう！」

こうして、宮治に新たな仲間である彩音が増えた。三人になった旅の次の目的地はガイアマウンテンだ。

第06話 「緑の剣」

かつての戦争は巨大なる木々の山で終結を迎えた。両軍の中間に位置するその山はちょうど攻めかかる時にぶつかりあう場所なのだ。そして、宮治たちは今、中間に位置する山　ガイアマウンテンに来ていたのだった。

ガイアマウンテンは木々に囲まれており、あたりを見渡せばそこには木と土しかない。

ガイアマウンテンを通るにはちゃんとした道があるのだが、その道は軍によって監視を続けられており、宮治たちは凸凹の土しかない道を通って頂上を目指していた。

「はあはあ、いい加減疲れたよ……」
風紋がそうつぶやいた。

「がんばれ、風紋。俺だって疲れているけどがんばってるんだよ」
「そんなこといっても……。彩音ちゃんは大丈夫？」

「わ、私もそろそろ……」

小さな声で彩音が言った。二人とも相当疲れているのを悟った宮治は少し休憩をとることにした。

チュンチュンという鳥の声が聞こえる。鳥は自由だ。戦争が起こればいても空を飛んでいる。戦争がなくても空を飛んでいる。

宮治は鳥の音をしみじみ聞きながら休憩をしていた。

すると、鳥の声がやんだ。すると、あたりは静寂に包まれた。そんな静寂を破ったのは風紋の一声だった。

「宮治、そろそろいいかい？」

「あ、ああ。彩音もいいかい？」

「ええ、いいわ」

三人は立ち上がり頂上目指して再度上り始めた。

それから何時間もたったとき、宮治たちは頂上にたどり着いた。

頂上に着いた彼らはそこからの景色を見た。

来た方向を見れば、ライトタウン、ソードシティ、ランドタウン、フラッシュシティ……たくさんの街が見える。

逆の方向を見れば、複数の街が見える。一番近くにある小さな町がガレアタウンだろう。

そして、一番遠くに見える溪谷……。あれこそがハイブリッド神殿があるという場所だろう。

「さあ、行きましょう」

彩音はそういつて歩き出した。

「西軍領域に行くか……」

どこからか謎の声が聞こえる。宮治たちは輪になり四方を確認した。宮治は剣を抜き戦闘態勢に入っている。

「誰だ！ 姿をあらわせ！」

「おろかな東軍の民よ。西軍領域に行くというのか」

「そうだ！ なにが悪い！」

「おろかな……」

その声が聞こえると、宮治の目の前から男が突如現れ宮治に切りかかってきた。

宮治はそれを剣で押さえたため、無傷だった。

「なかなかやるな」

「不意打ちとは卑怯な！」

「……」

突如現れたその男は宮治の赤い剣をじっと見ている。宮治は逆に男の剣を見た。その剣は緑色に輝く剣だった。

「なるほどな。いいだろう、赤い剣を持っているお前。私と戦え。そして、後ろのお前達は手出しをするな」

「な！ そんなことをしようちできるわけないでしょ！」

「さて、彩音。いいだろう、その戦いうけて立つ！」

「宮治！」

「どうせお前を倒さなきゃ、ここを通してくれないんだろ？ だっ

たら、戦ってやるよ」

「よくわかつているな。……行くぞ！」

緑の剣を持つ男は切りかかってきた。宮治はそれを剣で抑える。そして、押し切り相手の溝に切りかかった。

だが、男は負けていない。ちゃんとプロテクターを着けているようだ。

男はさらに切りかかってきた。宮治はそれを抑えるために剣を前に出した。

しかし、男は上に攻撃をするのではなく脚に攻撃をしてきた。

「ぐわっ」

「まだまだ！ ウィンド！」

男がそう言うと言風が突如吹き始めた。そして、その風は宮治を襲う。刃となった風は宮治の肌を切り裂いていく。

「くそっ……」

空は剣を振り回した。すると、あたりの温度が上昇し始めた。

「これでもくらってやがれ！ フレアバースト！」

剣の温度が上昇し小さな火を作り出した。そして、その小さな火たちを男に発射した。

だが、それを男は剣ですべて防いだ。そして、再度切りかかってきた。

「くっ」

「とどめだ！ ウィンドカッター！」

男は宮治の切りかかった。その一撃で宮治はその場に倒れてしまった。

「宮治！」

風紋と彩音が駆け寄る。彩音は術で宮治の回復を始めた。

「きさま！」

風紋が術で男を攻撃する。しかし、それをあっさりとかわした。

「たいしたことがないな……。なぜ、その剣を持っているか疑いたくなる」

「なに！？ 宮治を馬鹿にするのか！」

「そう受け止めたならあえて否定しない。そいつの心配はしなくてもいいだろう。みねうちだ。それより、お前達はこの程度の実力の男を連れて西軍領域に向かうというのか？」

「そうだ！ 僕たちはこの戦争を止めるんだ！ どんな実力であろうが、戦争をとめるには西軍領域に行くしかないんだよ！」

「ふふ、その意気込みがいつまで続くかな」

そう言うとその男は宮治たちが向かうべく方向に姿を消していった。

それから何時間がたったとき、宮治は目を覚ました。

「あ、気が付いた。風紋！ 宮治がおきたわよ」

「ここは？」

宮治は起き上がりながら彩音に聞いた。

「ガイアマウンテンの頂上よ」

「そうか。あの男はどうした？」

「西軍領域のほうに行ったよ。僕たちを馬鹿にした態度でね」

「そうか……。まさか、俺が負けるとは思いもしなかったな……。

奴は強かった」

「ねえ、宮治。まさかこれで西軍の領域に行かないなんていわないよね？」

「ああ、俺は絶対に戦争をとめなきゃいけないんだ。このまま引き下がることはしない」

「だよ。良かった、いつもの宮治で。ところで、聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「その剣 赤い剣はどこで手に入れたの？」

「ああ、これか。これはソードシティにいる老人に俺がもともと持っていた剣と交換したんだ」

「そうなんだ」

「それがどうかしたのか？」

「いやね、あの男が言ったんだ『その剣を持っているか疑いたくなる』って。もしかしたら、何か特別な剣なのかなあと思ったからさ」

「特別な剣か……。まさかね。あの老人がそんな特別な剣を簡単にくれるとは思わない」

「ま、特に気にすることじゃないってことね。さあ、それより早くこの山を降りましょう。そろそろ陽が落ちるわ」

宮治は立ち上がり、三人は山を降り始めた。

オレンジ色に染まったはっぱのアーチをくぐりながら……。

第07話 「謎」

「ここがガレアタウンか」

ガイアマウンテンを下りた宮治たちは、ガイアマウンテンのふもとにある町ガレアタウンへとやってきた。

ガレアタウンはガイアマウンテンのように木々と家並みが同一化しており、とても綺麗な町だった。

「さて、ここからどう行けばハイブリッド神殿にいけるんだ？」

宮治はガレアタウンの入り口前で風紋に聞いた。

「ここからさらに西に行ったところにあるよ」

「よしじゃあ早く行こうぜ」

「ちよつと待ってよ」

と、ここで彩音が言った。

「もう夜だし宮治も疲れてるでしょ？ 今日はこの町で休んでいきましようよ。それに、食料を買っておいたほうが良いし」

「そうだね。宮治、この際休もうよ。たまには宿に泊まるのもいいと思うよ」

宮治はそれに反対をしたが、二人に押し切られしぶしぶ宿に泊まることになった。

部屋は安価にするため、三人で一部屋になった。それに対して彩音は反対だったが、資金面の関係で結局そうなったのだ。

部屋は質素な部屋だった。ほとんどの装飾品はなく、必要最低限のものしかなかった。

「一個は私が使うわ」

「いや、じゃあ僕が後一つは使うね」

「おいおい、俺はどうなるんだよ！」

三人は室内で争い始めた。

部屋にあるベッドは二つしかなかった。つまり、一人はベッドで寝ることはできなかったのだ。そうなったら、あと一人は地面に直

接寝るしかないがそれを誰にするかで争っているのだ。

いつまでたつても決まらないので彼らはジャンケンで決めることにした。すると、魔術師が勝ち剣士は負けてしまったのだった。

次の日。宮治は背中が冷たいと感じながら目をつぶっていた。それもそうだろう。地面に直接寝ているのだから冷たいのは当たり前だ。

だが、よくよく考えると背中が冷たいのは変である。最初は冷たくても宮治自身の体温によって多少は暖かくなるはずである。

さすがにそこまで宮治は考えなかったが、ふと目を開けてみた。

「！？ どこだここは！？」

目を開けた視線の先。それは、昨日と違う天井であった。それに気づいた宮治が起き上がるとそこは何もなかった部屋よりさらに質素な部屋で、入り口は柵でぬけられないようになっている。

「牢獄じゃねえか！」

宮治は大声でそういった。すると、隣にいた彩音と風紋がおきだした。風紋はまだ少し寝ぼけている。

あたりを見回した彩音も風紋も一体なにがどうなったかわからないという様子だった。

すると、こつこつと足音が聞こえ始めたと思うと、宮治たちの牢獄の前に一人の男がやってきた。どうやら見張りのようだ。

「うるせえぞお前ら！ もう少し黙ってやがれ！」

「黙ってられるか！ 俺らはいつの間にかにこんな薄汚いところに閉じ込められたんだぞ！」

「そんなことおれの知ったことか！ お前らは捕まえられたんだ。おとなしくしてな」

「くっ」

「ねえねえ」

見張りと宮治が言い争っている中で、彩音は冷静だった。二人の口論が終わると、彩音はやさしく見張りにたずねた。

「この牢獄がある街はどこなの？」

「ああ、ウエストシティだ。って、お前らがそんなこと知っても何の得にもならんがな。とりあえず、おとなしくしてな」

見張りはそう言くと、その場から去っていつてしまった。

それを見届けてしまった、三人は脱出を試みようとして作戦会議を始めた。

「たくつ、こんな所に閉じ込めやがって。一体誰がこんな所に……」

「そんなことを言っていてもしようがないよ。ここを出る作戦を考えよう」

「そうだな。で、どうするんだ？」

「この脱出に宮治はいらないわ」

彩音は言った。それを聞いた宮治は少しむっとしながら「なんでだよ？」と言い返した。

「鞘の中を見てみなさいよ」

「あ！ 剣がない！」

「そういうこと。あなたは剣が使えなきゃほとんどなにもできないでしょ？ だから宮治はここでは役に立たないのよ」

「くそつ。あいつら俺の剣をもって行きやがったな」

「ねえねえ、僕のウィンドノヴァで壊せるかな？」

「ウィンドノヴァで？ 確かにあのわざは強力だったわね。でも、

これが壊れるかしら？ そうだね。私のサポート術を使ってウィンドノヴァの威力を上げましょう。そしたら、壊れるかもしれないわ」

「そうだね。じゃあ、それで行こう。宮治は少し下がっていてね」

宮治はそういわれ後ろに下がった。そして、風紋は彩音のサポート術”プラスパワー”を受け、魔術の威力を高めた。

「今よ！」

「いけえ！ ウィンドノヴァ！」

彩音の掛け声にウィンドノヴァが一気に放たれた！

いつものウィンドノヴァよりもプラスパワーを受けただけ威力が上がっている！

柵にウィンドノヴァが加わると、めきめきと柵が曲がり始めた。そして、ついに柵ははじけ、巨大な入り口が完成した。

それと同時に壊れた柵による巨大な音があたりにこだました。

「さあいそいでいくわよ！」

三人は牢獄を出て左手に進んでいった。さっきの見張りがそつちから出て行くところをみたからだ。

すると、後ろからだたとたという音が聞こえてきた。どうやら、右手には見張りがいたようだ。

「へへ、後ろの見張りじゃ俺たちには追いつかないぜ！」

「宮治前！」

風紋がそういうと、宮治は前を向いた。すると、そこにはさっきの見張りが剣を持って立ち構えていた。

「きさまら逃げ出すとはいいい度胸だ！」

「邪魔だ！ 頼んだ風紋！」

「うん！ ウィンドノヴァ！」

風紋は威力が元通りになったウィンドノヴァを放った。それによつて、見張りはその場に倒れてしまった。

「大丈夫、弱めてあるから死んではないよ。さあ、早く行こう」

「ちよつと待つて。もうそう言うわけには行かないみたいよ」

「え？」

宮治と風紋が彩音を見るように後ろを振り向いた。すると、そこには五人ほどの武器を持った見張りが来ていた。

「逃げ出すとはいいい度胸だな。お前らはここで始末してやる」

「へん！ そんなことができるかな」

宮治はそう言うのと倒れている見張りから剣を奪い取り、身構えた。「行くぜ！」

宮治はそう言うのと一気に駆け出した。そして、相手に切りかかった。

狭い通路での戦い。一対一が必然的になる戦いは宮治に有利だった。宮治はなかなかの剣の実力を持っているのだ。彼に一対一でか

なうものはほとんどいない。

そうして、宮治たちは無事に牢獄から逃げ出すことができるのだった。

「やっと出れたあ！」

牢獄から出た宮治は最初にそういった。牢獄から出た先は以外にも街の外だった。

どうやら、裏口から出てしまったようだ。だが、それは彼らにとつてはいいことであつた。

「一体なんだったのかしら？ あんなところに閉じ込められるなんて」

「俺たちが一体なにをしたって言うんだ？」

「それはお前らがこちらの領域に踏み込んだことに理由があるだろう」

と、ここで宮治でも風紋でも彩音でもない声が聞こえた。その声の主を探すと、そこにはガイアマウンテンの頂上で戦った緑の剣の男が現れた。

それを見た宮治は必然的に奪った剣を鞘から抜き出した。

「何もお前らを戦うつもりはない」

男はそう言つと、赤い剣を宮治に差し出した。

「これは俺の剣……。さてはお前が盗んだんだな！」

「盗んだものをこう簡単に差し出すとは思えんがな。まあ、なんともいうがいい」

「ねえ、一体どうして僕たちは閉じ込められたの？」

「忠告しただろう？ こちらの領域に踏み込むとな。それはこういう意味だ。西軍は東軍のものを人目で見抜く。お前らは簡単に見破られ西軍の連中にここに連れてこられたというわけだ。お前らは情けないというわけだ」

男はそう言つとその場を去つていこうとした。宮治はそれを見て男がいくのをとめた。

「待てよ。どうして、俺たちにそんなことを教える？ それに俺の

剣は一体どうしたんだ？」

「お前らには関係ないことだ」

男はそう言つと、宮治たちの問いかけにも足を止めずその場を去つていった。

第08話 「フレアの怪物」

誰の仕業かわからぬが、西軍の首都であるウエストタウンへと来てしまっていた宮治たち。

牢獄から脱出したため、ウエストシティに戻ることはできなかったため、南にある町”レフトタウン”によることとなった。

ガレアタウンで悲劇にあったので、彼らは注意して食材などの買出しをした。

「さて、これからどうするか？」

買出しが終わったとき宮治が言った。あたりはほとんど人気がなく暗くなっていた。

「どうするってなにがさ？」

「今日の泊まりだよ。まさか宿に泊まるなんてことはできないんだからな」

「そんなことないわよ」

と、宮治が言ったことに対して彩音は反論をした。

「宿に泊まることはできるわ。交代交代で見張りをつけておけばいいじゃない」

「よく戦場のテントでやるあれだね」

「そうそう。あれじゃよくわからないけど大体わかるわ。どう宮治？」

「じゃあ、そうしようか」

彼らはレフトタウンにある宿屋に泊まった。

またしてもジャンケンで負けてしまった宮治が最初に見張りをすることになり、その次に風紋、彩音と続いた。

そうして、何事もなくその晩を過ごしたのだった。

鶏が鳴きだした時間。彼らは昨日買った食材を使い朝食を取り、レフトタウンを後にした。それほど長居することはできないのだ。

レフトタウンを出発した彼らが向かう先。それは、今度こそハイブリッド神殿である。

ハイブリッド神殿はガレアタウンの西方向にあるため、ガレアタウンを目指し歩いていった。ガレアタウンの姿を認めると、彼らは方位磁石によって方位を割り出し西へと向かっていくのだった。

「なあ、少し暑くないか？」

と、宮治は言った。

上空は曇り覆われ太陽の光などは差し込んでいない。あたりは砂漠であるが……。

「そうねえ。確かにさっきより少し暑くなってきたかな」

一歩一歩西へ西へと向かえば向かうほど暑くなる……。彼らは一体なにがあるのだろうかと思いつながら歩いてた。

すると、彼らは巨大な岩山の姿を遠くに認めた。もしかと思い、その場へと近づいていった。

「ん？ 洞窟だ」

岩山に近づき認められたのは洞窟だった。洞窟の入り口の前までやってくると、そこに雑な字で”フレアどうくつ”と書かれていた。「フレアどうくつ？ ってことはここがハイブリッド神殿の入り口ってことか」

「そうみたいだね。にしても、フレアって言うくらいだから暑いなあ。僕は暑いのは嫌いだよ」

「そんなことを言わないの。がまんして奥に行きましょう」

彩音のその言葉に促され風紋はいやいやとフレアどうくつに入っていた。その時すでに宮治は洞窟内に入っていた。

フレアどうくつは、フレアと呼ばれるだけあり暑くあたりの岩の色が準赤色だった。岩も熱をおび、触るとやけどがしそうなほどだった。

そんな暑さの中、ひたすらに奥に進んでいった三人。そんな時に急激に暑くなり始めたのに気づいた風紋は言った。

「ねえ？ 何か暑すぎない？」

「確かに。一体どうなってるんだ？」

「奥にいけばいくほど暑くなるのは当たり前だと思うんだけど」

「でも、奥はハイブリッド神殿につながる出口だぜ？ そんな暑くなるわけないじゃないか」

「じゃあ、道でも間違えたのかしら？」

「分かれ道はなかったから間違えるわけではないよ」

「一体どうなってるんだ？」

不思議に思いながら彼らは奥へと進んでいった。そんなときだった。彼らの前に現れたのは巨大な部屋にたどり着いた。

「ここは？」

宮治がそう思った瞬間だった。突然地面が揺れ始めたのだ！

「な、なんだ！？」

「宮治下よ！」

揺れがどんどん強くなりだしたと思うと突然、真ん中の地に巨大な穴ができ始めたではないか！

そして、その穴から巨大な赤い生物が現れた！

「な、なんだあれ！？」

「もしかしてハイブリッド神殿を守ってる生物なんじゃ！？」

「だったら、倒すしかないようね。さあ行きましよう！」

彩音はそう言うと、プラスパワーを使い二人の力をパワーアップさせた。

それを受けた宮治は、剣を抜き巨大生物に切り込みを入れた。一方の風紋もウィンドノヴァで攻撃をする！

だが、巨大生物はそれらをもろともせず上空から巨大な岩を落としてきた。

「チッ！」

宮治はそれらをうまくかわし、彩音のところまで下がってきてしまった。

「あの岩が邪魔をしてくるな。ここは遠距離攻撃だ！ くらいな！ フレアバースト！」

宮治は小さな炎を作り出し発射したが、相手自体が燃えていることからそれをうけてもなんともなっていないかった。

「ここは僕に任せて！ アクアクリスター！」

風紋は巨大な水を作りだし、それを発射した。それも連発だ！ それらを受けた巨大生物は煙を放ち始めた。どうやら、蒸発してしまっているようだ。

だが、巨大生物もそれだけではやられない！ 蒸発している中で炎を噴出して宮治たちを襲う！

「バリア！」

飛んできた炎を彩音はバリアを使い受け止めた。しかし、巨大な威力の炎はそれをも押し切らんというばかりだ！

「クッならば！」

と、宮治は彩音が張られていないバリアを抜け出し、巨大生物に攻撃をしに向かった。

「くらえ！」

「宮治！ こうなれば僕も！」

宮治は巨大生物に切りかかった。それを見た風紋もバリアから抜けだし、アクアクリスターを発射した。

すると、巨大生物は炎を放つのをやめた。それと同時に彩音のバリアがはじけた。

「大丈夫かい彩音？」

アクアクリスターを放った風紋がバリアがはじけ座り込んだ彩音に近寄り言った。

「ええ、それより宮治を」

宮治はその剣で巨大生物を切り続けていた。だが、生物の間には穴があるため剣本来のダメージを与えることができなかった。

「いけえ！ エレキブースト！」

風紋は巨大な電撃を放った！ それは巨大生物をしばらくさせるほどの威力だ！

「宮治！」

「サンキュー！ 俺の必殺わざをくらえ！ ブレイクリッパー！」
宮治は穴をジャンプし飛び越えた。そして、宮治自身の一番強いわざ。切れ味抜群の剣で攻撃をした！

すると、巨大生物の腹部にきれつができた。きれつができるとどんどんとそれが大きくなり最終的には真つ二つとなってしまうた。

だが、巨大生物を倒したまではよかった。しかし、穴の中に宮治は落ちていく運命にあったのだった……。

「宮治！」

「おとさせはしないわ！ フィールドエリア！」

風が吹き抜ける谷。それらは彼らを祝福してくれるようにやさしく包み込んだ。

「ふう、あぶないところだったけど、何とかなったな」

「もう！ ちゃんと後を考えてよね」

「悪い悪い。しかしすごいなあわざわざ。突然地面がしかれるんだもんな」

「普段はあまり利用価値がないわざわざなんだけどね」

「それにしてもここすごいね。風も綺麗だしさ」

と、ここで風紋が言った。

「そうだな。それで、あの奥にあるあの建物がハイブリッド神殿か」
フレアどうくつを出た先にあった谷。その谷の奥に見える古そうな建物。それこそがハイブリッド神殿。

ついにハイブリッド神殿に彼らはやってきたのだった。

第09話 「ハイブリッド神殿」

ハイブリッド神殿。かつての戦争を終結するために旅に出た三人の者達が使った伝説の剣 フレイムブレード、ウイングブレード、ウォーターブレードが、この神殿には収められていた。

三本の剣はそれぞれの所持者が共同で守り続けた。それらの一家は三本の剣を守ることを使命としていた。

だが、その使命は突然破られた。

悪の心を持つものが神殿に現れた。そいつは一人であつたが、その巨大な力を使い三本の剣を盗み出そうとした。いや、盗んだのだ。守っていたもののほとんどはそいつに殺され生き残ったものはハイブリッド神殿には戻らなかったという。

そして、今現在、生き残ったものの消息は不明。一体、どこでなにをしているかどうかを知っているものはいなかったのだった。

そんな中、三本の剣の一本 ウォーターブレードのみがハイブリッド神殿にまもなく戻ってきた。誰が戻したかはわからなかった。しかし、残りの二本はいまだに戻ってこないのだった……。

「さて、じゃあ今日はここで休むことにしましょうか」

フレアどうくつを抜け、ハイブリッド神殿の姿を認めた宮治たち。彼らはフレアどうくつの前にまだ立っていたのだった。

それもそのはずだ。姿を認めることはできても、空をオレンジ色に染まり、今にでも暗闇になろうとしているのだから。

ハイブリッド神殿はどうくつから遠く、行くための道もがけと隣り合わせの状況であるため、暗闇の中で神殿に向かうというのは自殺行為なのだ。

その自殺行為について当初は宮治はあまり理解していなかった。だが、風紋と彩音に言われ、二対一では勝てないとふんだのか二人に同意したのだった。

でも、後々考えたところでは二人に同意してよかったと胸をなでおろすのだった。

「しかしあの怪物はやばかったな」

と、食事の後宮治は話しを切り出した。

「まさかあんな巨大な怪物がここを守っているなんて思いもしないもんなあ」

「そうだよな。フレアどうくつの奥を守っているとわかれば、たくさんの人が押しかけてきそうなもののに」

「確かに気が強い人ならそうだけど、気の弱い人だったら絶対にここにはもう来ないでしょうね」

「気が強い人か……。俺らはそれに部類されるのかな？」

「たぶんされるんでしょうね。おそらく、神殿の中にはまだ私たちを阻む存在がいるでしょうね」

「また、あんな怪物が出てくるのかな？ それだったらいやだな」

……。もう、あんな怪物を見たくないよ」

「風紋の術があれば怪物が出てきても大丈夫さ」

「そういう問題じゃないのに……」

「風紋は見ることで体がいやなのよね？」

「うん。彩音もそうでしょ？」

「まあ、ええ」

「とりあえず、あんなのが出てきたら頼んだぜ、風紋」

「ええ！　なんで僕が……」

翌日。彼らはハイブリッド神殿に向かった。危険な道を通って……。

フレアどうくつ出口から出発して何十分とたったころ、彼らはハイブリッド神殿の前にやってきた。

「ここからか……」

宮治はつぶやいた。

彼らはハイブリッド神殿の中へと入っていった。そう、この戦争

を終結させるために安置されているという剣を手に入れるために。
戦争を終結させるために。

ハイブリッド神殿の中はひんやりとしており、真っ暗だった。あたりは遺跡のような雰囲気をかもし出していた。

入り口からいける道は複数あり、どの道をとおれば伝説の剣がある道をとおれるかはわからなかった。彼らはとりあえずまっすぐの道を進んでいった。

奥を進むと、骨だけの怪物や空を飛びこもりが大きくなったような怪物が、三人の前に立ちはだかった。だが、そんな怪物も宮治と風紋の攻撃にはかなわなかった。三人は一気に億へと進んでいった。

だが、また二手に通路は分かれ、今度は右の通路へと入り進んだ。だが、その通路の奥は行き止まりだった。

そのため、彼らは戻り、左の通路へと入った。すると、また右と左の通路が出てきて、今度は左の道へと向かった。すると、そこはまた行き止まりだった。

「ああもう！」

それから何回もさまよい、最終的に入り口まで戻ってきて宮治は大声を出していった。

「大声出さないでよ宮治！」

宮治の大声は周囲を囲まれている神殿の中に響き渡った。

「だってもう何時間もこんなところをさまよってるんだぜ？ いい加減イラつくぜ」

「後一つの通路だけなんだから我慢してよ。この右通路だよ」

神殿に宮治たちが入ってから、もう何時間もたったころ。彼らは入り口にある三つの通路のうち正面と左の通路をすでにさまよって、ついには入り口に戻ってきたのだった。

よって、目的地は右の道にあるのだ。それが何時間もたって彼らは知った。

右通路を三人は進んでいった。すると、正面の通路や左の通路とは明らかに怪物が違っていた。いや、怪物自体は同じだった。だが、力が違うのだ！ 宮治たちが同じ攻撃をしても同じ手数では倒れないのだ。そして、攻撃してきたときのパワーも違っていた。

「くそっ！ 何でこんな急に強くなるんだ！」

「ウインドノヴァー！」

宮治の後ろから迫ってきた骨だけの怪物に風紋はウインドノヴァーで攻撃した。怪物はその一撃を受け、その場に倒れこみ跡形もなく消え去ってしまった。

「ふう、大丈夫宮治？ もっと気をつけなきゃダメだよ」

「わかってるって。急に強くなるもんだからさ」

「もう！ そういつてごまかすんだから。さあ、早く行きましょ。」

こんなところでまっけていたらいつ襲われるかわかりやしない」

パワーアップした怪物たち。それが物語っているものは、この奥に伝説の剣があること。それは三人とも承知していた。三人は強力な怪物たちに立ち向かいながら奥へと進んだ。

そして、三人は奥に何か部屋があるのを認めた。

「あそこにあるんじゃないか？」

「ええ。その可能性は十分あるわね。まあ、急いだってどうしようもないからゆっくりいきましょ。何かわなが仕掛けられているかもしれないから」

彩音はおだやかにいった。だが、内心はとてもドキドキしていた。ついに戦争を終結させられる剣を手に入れることができるのだから。その部屋は天井は高く奥行きもなかなかあり、横幅も広がった。奥のほうに何やら小さな別の部屋に通じると思われる通路がある。だが、その部屋の前には宮治たちを驚かすものがあつた。

「来たか……」

「お前は！ なんでこんなところにいやがる！」

宮治は剣を抜いた。そして、緑の剣を持っているその男に「攻撃するぞ」といわんばかりに剣を構えた。

「私は伝説の剣を手に入れるために来ただけのことだ」

「それは俺らが先だ！」

「後から来たお前達に言われたくないな」

「なんだと！？ 第一、お前みたいな奴に使わせるわけにはいかな
いんだよ！ 伝説の剣をな！」

「ならば、力ずくで手に入れるがいい」

男はそう言うつと緑の剣を構えた。

「後ろの二人も加わるといい。お前一人では相手にならんからな」

「なんだと！？ あのときの俺と一緒にするんじゃない！」

宮治はそう言うつと男に接近した。それと同時に風紋と彩音も動き
出すのだった。

第10話 「正体」

「くらいな！ ブレイクリッパ―！」

「ふん！」

宮治はブレイクリッパ―で男に攻撃を仕掛けた。だが、男は自分の剣でその攻撃から身を守った。

「あまい！」

男は宮治の攻撃を押し切り攻撃をやめさせた。

「ウインド！」

「フレアバースト！」

「アクアクリスター！」

男はウインドで攻撃を仕掛けてきた。だが、宮治のフレアバーストによって、二つのわざはぶつかり合う。ぶつかり合う中、風紋のアクアクリスターが発射されフレアバーストを援護した。

それによって、ウインドは打ち消されフレアバーストとアクアクリスターが男を襲った。

「もう一発くらえ！」

「ファイヤーバースト！」

宮治のフレアバーストに、風紋の新技”ファイヤーバースト”が放たれた。ファイヤーバーストは大きな炎の玉が発射されるというシンプルなわざだ。

フレアバーストにファイヤーバーストが加わり、個々のフレアバーストの火力が上がりファイヤーバースト自体という二つの強力な攻撃が男に向かって行く！

その攻撃を男は受けた。衣服はどんどん焼けていく　かと思われた。だが実際は違った。

最初、宮治たちは男が炎で焼ききられていると思っていた。だが、三人の前に現れたその男は熱そうにしている様子などなく、逆に水にぬれていた。

「ぬるいな」

「な！？ 一体どうして……！？」

「私をなめるな。その程度の攻撃で私が倒せると思ったら大間違いだ！」

男はそう言うのと、今度は宮治たちに いや、宮治に接近してきた！

「くっ！」

宮治は男の攻撃があまりにもすばやいため、攻撃を防ぐぐらいしかすることができなかった。男は特殊な攻撃ではなく、単調な切りかかる攻撃を仕掛けてきた。

「ほう、この攻撃を止めるなんてな」

「俺をなめるな！」

宮治は男を押し切り、切りかかった その時わずかながら剣が光った が、男は簡単に防ぎ宮治の剣を吹き飛ばした。

「ウィンドノヴァー！」

男は宮治に切りかかろうとしたが、風紋のウィンドノヴァーによってそれがさえぎられた。

「宮治！ これ！」

男が二、三步下がった時、飛ばされた宮治の剣を彩音が投げて渡した。

「彩音、サンキュー！」

宮治はそれを受け取り、男に向かってフレアバーストを放った。

男は突然、水を体にまとい始め、フレアバーストを防いだ。

「な！？」

「まさか、その程度の攻撃にこれを使う破目になるとは思いませんでした。まさか、お前の攻撃がそこまでクイックだとは思いませんでしたぞ」

「これだけじゃないぜ！」

そう言うのと宮治の剣がさらに赤く燃え始めた。

「いけえ！ フレームバースト！」

剣の色が完全に真っ赤になった時、宮治は剣を振った。すると、巨大な火の玉が無数、男へと飛んでゆく！

「アクアリング！」

男は体に水をまとい始めた。どうやら、先ほどからこのわざを使っていたようだ。

フレイムブーストは男に全部直撃した。

「どうだ！ 俺が取得したこのフレイムブーストは！」

「一体そんなわざをいつそんなわざを……？」

「ん？ ああ、そういえばどうしてこんなわざ取得したんだ？」

「は？」

そうだったのは彩音だった。どうやら、その言葉に呆気にとられたようだ。

「いや『は？』とか言われても困るんだけど。よくよく考えるとなんで俺がこんなすごいわざを使えたんだろう？」

「それはお前の剣の能力だ」

宮治の後ろから声が聞こえた。宮治が前を向くとそこには男が立っていた。だが、所々の衣服が焼けて破れている。

「あの攻撃を受けて……！」

「アクアリングを押し切った奴は久しぶりだ」

「ならばもう一発打ってやるぜ」

宮治は先ほどのように剣を真っ赤にさせることを試みた。しかし、先ほどのように剣は真っ赤に燃えなかった。

「あれ？ なんで？」

「お前がその剣を使いこなしていないからだ」と、男が言った。

「なんだと？」

「お前は知らないのか？ その剣が伝説の剣の一本であることをしばらく沈黙が続いた。

「ええ！！ この剣が伝説の剣の一本！？」

「そうだ。お前が使った先ほどのわざ。あれは、炎の剣が持つ能力。

そして、これが伝説の剣の一本”緑の剣”の能力だ！」

男はそう言うともまるでトルネードがおき始めた。そして、そのトルネードが宮治たちを襲った。

「お前！」

「アクアクリスター！」

風紋はアクアクリスターを発射した。だが、男は個々のアクアクリスターを剣で切り落とした。

「私はお前達と争うつもりはない」

と、男は言った。そして、さらに言葉を続けた。

「私はお前達と同じ目的を持った者だ」

「お前が？」

「そうだ。お前達もこの戦争を終結させたいのだろう？」

「そうだけど、一体それをどうして……」

「伝説の剣を手に入れようとしている者は戦争を終結させたいと思うもの以外はないのだ。強力な剣だがこれで世界征服などをするとはできないのだからな」

「なぜだ？」

「戦争を終結させた剣だ。いわば正義の剣。そのようなもので悪用することなどできないだろう。どうだ？ 戦争を終結させようとしているもの同士、手を組まないか？」

「……。いいだろう。お前のその言葉信じてやる」

「ちょっと宮治！ あんな奴の言葉を信じるの！？」

「どっちにしる、伝説の剣の一本はあいつが持っているんだ。だったら、あいつに協力してもらったほうがいいだろ？ それに剣を操るたって、俺は三刀流なんて無理だぜ」

「でも……」

「大丈夫だよ」

と、ここで風紋は言った。

「宮治とあいつを信じようよ、彩音」

「風紋まで……。もう！ 勝手にしなさい」

彩音は外方を向いた。

「よろしくな。ええつと……」

「私は宮本剣次という」

「俺は川原宮治っていうんだ。よろしくな、剣次！」

四人は自己紹介をした。

そして、三人に新たな仲間が増えたのだった。

第11話 「最後の剣」

「そりゃ！」

ハイブリッド神殿の外。太陽の光がてんと照っている。その下で宮治は、右手に赤い剣を持ち左手に青い剣を持ち、剣次に向かって攻撃をしていた。

剣次は宮治にたいして緑の剣を使い、二つの剣による攻撃を防いだ。

「まだまだ脇が甘いな」

攻撃を防いだ剣次は言った。

「そんなこといったってよ、俺だって二刀流は初めてなんだよ」

時はさかのぼり一日前。

四人は自己紹介をした後、剣次は言った。

「ところで、川原以外で剣を使える奴はいるのか？」

「え？ 僕は使えないけど」

「私も。剣を持ったことさえないわ」

「それがどうしたっていうんだよ？」

「この奥に入るといい」

と、剣次はそう言うところある箇所の壁を押した。すると、そこに通路ができたではないか！

剣次は三人を招き、その通路を通っていった。すると、小部屋が現れた。そこには一本の青い剣が安置されていた。

「これは……？」

「これこそ伝説の剣の一本である、青の剣。ここに、赤、緑、青の剣がそろったわけだ」

「本当か！ やったぜ！ これで三本そろった！」

宮治が声を張り上げていった。部屋中にその声が響いた。

「うるさいな……。そんなに喜んでる暇などないぞ」

「んな訳あるか」

「では聞くが、その青の剣は誰が使うのか？」

「は？」

「『は？』ではない。私は緑の剣。お前は赤の剣。そしたら、青の剣は誰が使うのだ？」

「まだ、風紋と彩音がいるだろ。どちらかが使えばいいじゃないか」

「私は無理。剣なんて持ったことさえないわ。それに剣を使えるほどの実力もないわ」

「僕も剣はちよつと……。肉弾戦はダメなんだ」

「おいおい、そしたらこいつはどうなるんだよ？」

「だから言ってるのだ。その剣は誰が使うのだとな」

「うーん。じゃあ、こいつは誰が使うか……」

部屋は静寂に包まれた。数十秒たつと、剣次は言った。

「私に一つ案がないわけでもないのだが……」

「案？　どんなのだよ。何も考えられないからその案を聞くよ」

「お前は二刀流はできるか？」

急に質問されたので宮治は少し言葉の処理するのに数秒使ってしまった。だが、処理が完了すると言った。

「そうか！　二刀流だったら使えるな。でも、残念ながら俺は二刀流なんてできないぜ。今まで少しかやったことはあるけどな」

「ならば頼む。私は二刀流などするつもりはない。風紋と彩音も剣より魔法の方が使えるだろう」

「ちよつと待て！　なんで俺が二刀流なんだよ？　剣次も剣士ならああたこうだ言わずにやればいいじゃないか」

「私は一度も二刀流をやったことがない。さらに魔法を使う時もある。二刀もつと邪魔になるのだな。その分、経験もあり魔法も使わない宮治ならば都合がいいのだ」

「でも……二刀流なんて自信ないぜ？」

「大丈夫だ。その辺については私が指導してやろう」

こんな経過で宮治は二刀使うことになり、今現在、こうして剣次と共に二刀流の練習をしていた。

だが、少しばかりの経験で昔に二刀使っていた宮治にとってそれはとても難しいことだった。両手に剣。これほどやりにくいことはないだろう。

しかも、使っている剣は”伝説の剣”と呼ばれたものだ。それだけ扱いも難しい作りで、剣本来の力を一気に二つ引き出すことは難しいのだ。

来る日も来る日も宮治は練習を続けた。剣次もそれに付き合った。しばらくの間、ハイブリッド神殿の近くで寝泊りすることに決まっていたので、彩音は魔法”ワープ”を使い、風紋と共に食料の買出しや戦争の状況などを探っていた。

そんなある日。神殿の中で練習をしていた宮治と剣次。神殿内の敵は剣次にとってはたいした敵ではなかったが、二刀流にして間もない宮治にとっても大変だった。

そんな中。行き止まりへと来た二人。そこは他の行き止まりとは違い何かしらの雰囲気が違っていた。

「ここだけつくりが悪いのかな？」

「それもありうるが……。何かしらありそうだな」

剣次はそう言つと、壁をたたき始めた。

「なにしてるんだ？」

「壁の奥に空洞があるかどうかを調べているのだ。こうすることによって、隠し通路などを探し出すことができる」

剣次はトントントントンと壁を地道に一箇所ずつたたいていく。宮治も逆側から同じことを始めた。

すると、トントンという音ではなく別の音に変わった場所が一箇所発見した。

「おい、剣次。ここだけ音が違うぞ」

「でかした。ちょっと、下がっている」

剣次は宮治を二歩分後ろに下がらせた。すると、緑の剣が光りだしさらに強い緑色が剣を覆う。そして、その剣で剣次は壁に切りかった。

すると、壁は大きな音を上げほこりがまった。ほこりがなくなると、二人の前に予想通り一つの通路ができていた。

「通路ができてる……」

「剣の安置部屋以外にも隠し通路があるとは知らなかったな。行くぞ」

二人は通路を通っていった。

通路を通り過ぎ、そこに現れたのは小さな部屋。青の剣が安置されていたあの部屋と同じ広さである。

そして、剣が置いてあった場所には、一冊の本が置かれていた。古びて紙の色が完全に変色してしまっている。剣次はその本を取りページをめくった。

それにはこうかかれていた。

『炎。水。風の剣を使いこなすもの戦争を終結させる力を得るなり。また、戦争を勃発させる力を得るなり。所持者の考えによりどちらを選ぶかは決めることを許す』

「どうやら、三本の剣が集まるとどうなるかを記した本のような」

剣次は一息つき、続けていった。

「そして、赤の剣は炎の剣。青の剣は水の剣。緑の剣は風の剣であることがこれで立証された。これでもう、この剣に関することは何もないだろうな」

「どういうことだ？」

「私はすでに三本の剣に関する情報をすべて知っているというのだからつての所持者。この剣が特別な能力を持ったことについてなどだな」

「ぜひとも、俺に聞かせてくれよ」

「いづれかな。今はそれどころではなからう」

剣次はそう言うと言をそこにおいて部屋を出て行った。宮治もそ

の後を追った。

外に出ると二人は、また、練習を再開したのだった。

第12話 「決意」

宮治が二刀流になってから、一ヶ月がたった。

一ヶ月間、毎日毎日練習を続けた宮治だったが、当初よりかは上達しているもののまだまだの実力になっていた。それに、赤の剣の力の解放をコントロールすることはできるようになったのだが、青の剣の力の解放はまだできないのだった。

そんなある日。いつものように情報収集と食料調達から帰ってきた、風紋と彩音が衝撃のニュースを持ってきた。

「大変よ二人とも！」

彩音は大声で言った。その声を聞いた宮治と剣次は練習をやめ彩音にどうしたか尋ねた。

「戦争が……戦争が決着を迎えるわ！」

「どういうことだ？」

その言葉を聞いた剣次は冷静に聞き返した。それに対して宮治は心が動揺しているようだ。

「東軍が西軍領域に踏み込むっていうらしいの！ あくまで噂なんだけど、これが本当のことだったら大変よ。二つの軍がついに正面からぶつかり合うんですから！」

「おいおい、じゃあ、俺たちも行かないとダメってことか……」

「仕方あるまい。その戦いを抑えるべく、ガイアマウンテンへと急ぐことにしよう」

「なんでガイアマウンテンに行くの？」

風紋が訊いた。

「東軍が西軍に攻め込むならば、ガイアマウンテンを通らねばならない。西軍は相手が大体攻め込むことがわかっているのなら、ガイアマウンテンで見張っているだろう。つまり、両者はガイアマウンテンでぶつかり合うのだ」

「なるほど。でも、大丈夫かな……俺はまだ青の剣の力を最大限に

引き出せないし二刀流だつて……」

「大丈夫だ。まだまだ未熟なのは認めるが、お前なら何とかなるだろう。ところで、その攻め込むというのはいつなんだ？」

「わからないわ。でも、三日の間に攻め込むとかって言う話し。これも本当かどうかはわからないわ」

「わかった。ならば私が直接情報収集へと向かうことにしよう。悪いが彩音。私をレフトタウンへとワープさせてくれ」

彩音は言われたとおりに剣次をレフトタウンへとワープさせた。

剣次はワープ際に「半日ほど帰ってこない」と言い残しながら。

レフトタウンというのは、ガレアタウンとウエストシティにある小さな町である。三人も一度だけ行ったことはあるが本当に小さな町だ。

それから三人は心が落ち着かなかった。いつ東軍と西軍がぶつかり合い、たくさんの人々が死んでいくのかと思うと……。

剣次が戻ってくると、情報収集の結果を三人に教えた。

「どうやら、決着がつくのは明後日のようだ」

「明後日だつて？」

「ああ」

「じゃあ、僕たちものんびりしているひまはないんだね」

「そう言うことになる。とりあえず、今日は陽が落ち始める。明日、調整をすることにして今日は練習を続けることとしよう」

翌日の夜。その日の夕食は彩音がもつとも得意とする料理のカレーライスだった。「明日は決戦の日だから」という理由で作ったのだが、宮治にはよく意味がわからなかった。

「ついに明日だね」

夕食後に火を囲んでいる他の三人に風紋は言った

「ああ、そうだな。俺らの旅もこれで終わるんだ。明日ですべての決着がつく」

「なぜ」

と、ここで剣次が割り込んできた。

「なぜ、お前達は戦争を終結させようというのだ？」

剣次が前々から思っていた質問をぶつけた。すると、三人は一人ずつその質問に答えていった。

自分の母が殺されたこと。両親が肩身の重い生活をしていること。愛すべきものが死ぬ前に戦争を終結させるため。自分の故郷が壊されないため……。

「そうか」

すべての話を聞き終わった剣次はそう一言言った。

「剣次はどうして戦争を終結させよう？」

「私には理由などない。戦争とは醜いもの。醜いものは排除すべきだろう。そう考えただけだ」

「でも、そんな理由で命をかけることはしないと思うよ」

「私の命などたいしたものではない。一人の命に引き換えて何百人の命が助けられるならよからう」

「でも、そうとは限らないでしょ？ あなた自身の命が無駄になくなる場合もあるのよ」

「わかってる。だが、私は旅に出たのだ。この戦争を終結させるという旅に。伝説の剣を求めて。さあ、もう今日は休もう。旅の終結は明日なのだからな」

翌日。あたりが少し明るくなってきた時、宮治はすでにおきて練習をしていた。

まだ、二刀流を完璧にマスターしたといえない宮治はあせりを感じていたのだ。いまさらあせってもしょうがない。そう思っていたけれど、やはりやるべきことはやっておくべきだと思ったのだ。

「早いんだね」

宮治に話しかけてきた。後ろを振り向くとそこには風紋が立っていた。

「ああ、まだまだだからな。最後まで練習しておかなきゃな。それより風紋も早いな？」

「うん。なんだか、おきちゃって。いつもならもつと寝てるんだけど……。やっぱり緊張してるのかな」

「無理もないさ。戦争を終結させる日が来たんだから。それに俺たち自身の身が危険でもあるのだから」

「そうだね。……ねえ、宮治。戦争が終わったらどうするつもりなの？」

「ライトタウンに戻るよ。町はぼろぼろだし、復興しないといけないからな。俺が育った町を捨てるわけには行かない。それに母さんにも会わないといけないし」

「そう……」

「そういう風紋はどうするつもりなんだ？ やっぱり、両親のところに戻るのか？」

「うん。待たせているから。今日の戦いがんばろう、宮治。僕たちの戻るべきところに戻るために」

「ああ、がんばろうぜ！」

寢床に戻ると彩音と剣次はおきていた。彩音は朝食の準備をしている。

朝食を済ませ、一時間ほど時間を置いてから四人は一箇所に円を作りまとまった。

「ついにいくんだな、ガイアマウンテンに」

宮治が言った。

「ええ、絶対、この戦争を終結させるわ」

「目的を達成するために。故郷に帰るために」

「そして、たくさんのものの命を救う」

「行こう！ ガイアマウンテンに！」

四人は彩音の”ワープ”でガイアマウンテンへと移動したのだった。

第13話 「東軍・西軍」

ガイアマウンテンは静寂に包まれていた。一風も通っていない。まるで何かを察しているように。

宮治たちがワープしてきたのはガイアマウンテン頂上付近の林の中だった。あたりは木々で覆われており誰かに見つかる心配はない。「あそこに誰かいるよ」

風紋は頂上を指差した。木々の隙間から見えるその姿は、鎧をまといあたりを監視している。

「あれは西軍兵士だな。東軍がいつ攻め込むかがわからないからあそこから監視しているのだろう。あそこだったら、あたりを見まわせるからな」

「でも、一人とは無用心だな」

「ここから見えるのは一人だけだが他のところではもっというのだろう」

「ところでこれからどうするの？」

「戦争をとめるといっても三本の剣の力を完全に引き出すだけではダメだ。三本の剣が出す聖なる光を両軍の首領に同時に当てなければならぬ」

だが、わかるだろうがそれは難しいことだ。両軍の首領が同時に戦場に出てくることなどありはしないのだからな」

「じゃあどうすれば？」

「まだ、時間はあるようだ。西軍首領に直接会ってみることにしよう。会う方法などは私に任せるがいい」

宮治たちは頂上へ上り、監視兵に「東軍の情報を仕入れてきた。西軍首領様に会わせてくれ」といった。すると、監視兵は疑いながらも西軍首領のところまで連れて行ってくれた。

向かっている途中。監視兵はいろいろと質問をしてきたが、剣次はこちらの不利にならない回答を返し続けた。

「なんのようだ？」

左右にボディーガードをつけながら西軍の首領は、宮治たちを連れてきた監視兵に訊いた。監視兵は剣次が言ったことを繰り返した。「ふむ、どんな情報だ？」

今度は宮治たちに向かって訊いた。

「実は、東軍首領のラフラから和解したいと申されてきました」
西軍首領は眉を上げた。

「つきましては、西軍首領のガレフ様の承諾を得ればと思い……」
「お前、本気で言っているのか？」

剣次が話している途中で西軍首領のガレフは言った。

「本気でございます」

「そんな馬鹿な話があるか。そもそも、お前達がここに来た理由と食い違っている」

「和解の話してここに来ましたらお断りになられると思ったから嘘をついたのでございます」

「ふむ、なかなか頭の切れる奴だな。だが、お前達はここで消えてもらうことにしよう」

ガレフがそう言うあたり兵士達が剣や槍を四人に向けてきた。四人は包囲されてしまったのだ。

「仕方ないな……」

剣次はつばやくと緑の剣を取り出した。それを見た宮治も赤の剣と青の剣を取り出した。風紋と彩音も構えた。

「私たちはここで消えるわけには行かないのでな。消えてもらう！」

剣次はそう言う剣を構えている兵士達に切りかかっていった。

そして、宮治たちも。

突然の動きだったのであたりの兵士が二人ずつ倒れてからいっせいに動き出した。だが、彩音を除く三人は兵士をどんとなぎ倒していった。

「なにをしている！ とつととやらんか！」

ガレフが大声で言う。兵士達は意気込むが三人の攻撃に歯が立た

ずどんどんと倒されていく。

「私たちは」

剣次は兵士を倒しながら、つぶやいた。その声はガレフにも聞こえていた。

「この戦争を終結させてやる。無駄な抵抗はやめるんだな」

剣次の剣が緑色に染まっていく。すると、あたりの木々がざわざわとなりだした。

「彩音！ バリアだ！」

宮治と風紋は彩音の近くによっていく。そして、バリアの中に納まった。それと同時にあたりには竜巻ができた。木々は今にも折れそうだった。

「スパイラルトルネード！」

人は竜巻に飲み込まれ、物はあたりへと吹き飛ばされた。宮治たちもそれに襲われたが、バリアのおかげでそれを防ぐことができた。木々のざわめきがやむとあたりにはほとんど何もなくなっていた。あるものは風に吹き飛ばされた物ばかりで、ある場所は少し遠い場所だ。

「おいおい」

彩音のバリアを解くと宮治は言った。

「なにもここまでしなくていいだろうよ」

「面倒なものに体力を使うべきではない。お前達もよくバリアを張ったな。それにより、頂上へと向かうぞ。ここにいたのが西軍兵士のすべてではないのだ。奴らを全員なぎ倒さねばならん」

「どういうことだ？」

「両軍の首領同士がぶつかり合う時は兵士たちの数が少なくなった時だ。その状況にするには兵士達をどんどんと倒していかなければならない」

「じゃあ、まだ東軍の兵士も倒さなきゃ」

「そうだ。だが、まずは西軍兵士を倒す。行くぞ」

剣次は走り出した。三人もそれに負けじと頂上へと向かう。

四人が着いた時の頂上は悲惨なものだった。あたりには切り倒されている人物がたくさん倒れている。

そう、もう頂上では東軍と西軍はぶつかり合っていたのだ！ 戦いはすでに始まっている。

「なんてことだ。一足遅かったか……」

「ど、どうするの？」

「こうなればまとめて相手にするしかあるまい。ここはまとまって行動するぞ」

「わかった。行こう！」

宮治たちは戦いの中に紛れ込んでいった。

「フレアバースト！」

「ウィンドノヴァー！」

「ホーリーバースト！」

「ウィンドカッター！」

宮治はフレアバーストで。風紋はウィンドノヴァーで。彩音は光っている玉を乱射するホーリーバーストで。剣次はウィンドカッターで攻撃を開始した。

それらの攻撃により人々は倒れていくが、数は減る様子がない。実際には減っているが彼らの目では減っていないのだ。

よそ者が攻撃してきていることがわかり、手が余っている者は宮治たちに攻撃を仕掛け始めた。

だが、攻め込んできたものには宮治と剣次の剣で攻撃し、攻め込まれていない時は魔法を使いながら攻撃をしていた。

順調に攻撃を仕掛けていた。だが、その順調さも急にかけてしまった。

「おのれ。邪魔ばかりしやがって。これでもくらうがいい」

様子を見ていた西軍首領のガレフは怒っていた。

我が軍の攻撃が妨げられているのだ、当たり前だろう。このことを知ったら東軍首領も怒るだろう。

怒りに心が支配されかけているガレフ。

「サンダーボルト！」

ガレフは巨大な電撃を作り出し、それを宮治たちに放った！

「ん？ あぶない！」

頭上から電撃が降りてくることを確認したのは剣次だった。剣次は声を出し、その場から去ることを「あぶない」にこめた。

だが、それは風紋には届かなかった。魔法を使うために呪文を唱えていたのだ。唱えている時は集中しなければならない。

「風紋！ あぶない！」

その様子を見ていた宮治は風紋に向かって走りだし、突き飛ばした。突き飛ばされた風紋は呪文を中断された。

「み、宮治！？」

サンダーボルトが墜落した。

第14話 「力の解放」

「宮治！」

風紋と彩音が宮治に駆け寄る。宮治はサンダーボルトが墜落した場所で倒れていた。体に目立った外傷などはなかった。ただ、ところどころやけどを負っていた。

いくら呼びかけても宮治は意識を取り戻さない。完全に意識を失ってしまった。彩音は回復魔法で宮治のダメージを回復させているがまったく回復する気配がない。

「風紋！ お前も手伝え！ そいつに寄り添っていても仕方がないぞ！」

剣次が宮治をずっと見ている風紋に言った。あたりの東軍兵士達が彼ら四人の周りを少しながら囲み始め、攻撃をしてきていた。

「でも……」

「でもない！ とつととしろ！」

「風紋。宮治なら私が何とかするから、あなたは剣次を手伝ってあげて」

宮治を治療しながら彩音は言った。彩音たちの回りにはバリアが張られており敵の攻撃は受けずに済んでいた。

「ね？ 風紋。あなたが頼りなのよ。このままじゃ剣次は持たないわ」

「……。わかった。彩音、バリアを解いて」

「がんばってね。宮治は私がちゃんと治療するから」

彩音はバリアを解いた。風紋はバリアから出ると、呪文を唱え始め東軍兵士達にアクアクリスターを放った。

あたりではみながんばって戦っている。そんなことを知ってか知らずか宮治は夢の世界にいた。

あたりは真つ暗だ。何も見えない真の闇。あたりには何かがあり、宮治をそこから動かせない。

「ここは一体……？」

自分の声がこだまして自分の耳に入ってきた。

「……ねんよ」

ふっと、何か声が聞こえる。どこかで聞いたことのある声。

「しょうねんよ」

今度ははつきりと聞こえた。そうだ、ソードシティにいたあの老人の声だ。

「あなたはソードシティの……」

宮治はつぶやいた。だが、声はそれを無視して言った。

「少年よ。伝説の剣を三本集めたな。これでおぬしの求める戦争の終結をすることができる。だが、おぬしに置かれている状況はつらい」

「どういうことですか？」

「緑の剣を持つ少年は完全に剣のパワーを開放している。おぬしも赤の剣のパワーはほぼ開放しているだろう。だが、青の剣だけはどうしようもない。伝説の剣を二本使うとはいいい度胸じゃ」

「じゃあ、どうしたら……」

「青の剣は赤の剣と相対するもの。本来ならば同時に開放することはできぬ。だが、開放できる方法はある。

それは”合体”じゃ」

「”合体”？」

「たいしたことはない。両腕で二本の剣を持てばいいのじゃ。何も難しいことはあらん。さあ、そろそろ行け。おぬしの帰りを待っている者が三人いるぞ」

それから宮治の耳には何も聞こえなくなった。しばらくたつと、誰かが宮治のことを呼んでいる。心地よい気持ちを感じながら。

宮治が目を開けた。すると、目に映ったのは彩音だった。

「よかった。気がついたのね」

宮治は起き上がった。あたりを見回すとそこでは戦乱が続いていた。彩音に目を戻すと、手には杖を持っている。心地よかったのは

回復魔法を使ってくれていたからのようだ。

「体のほうは大丈夫？」

「ああ。それより風紋は？」

「大丈夫よ。えっと ほら、あそこで戦っている」

彩音はあたりを見回してから風紋を見つけて指差した。

「よかった。剣次の奴はあそこにいるな。よし、俺も行くぜ！」

宮治は剣次のところへと向かおうとした。だが、何も無いところ
で何かにぶつかってその場にしりもちをついた。

「あらごめん。バリア張ってあるのよ」

「それを先に行ってくれよ……」

「ごめんごめん」

彩音はバリアを解いた。解けると宮治は飛び出して、剣次のところへと向かった。

「剣次！」

剣次は五人ほどの西軍兵士と戦っていた。宮治はそれに加わりながら話を続けた。宮治は老人に言われたとおりに二本の剣を両手で持っている。

「青の剣のパワーは完全に開放できる兆しが見えた。これからどうすればいい？」

「ならば、剣のパワーを一気に開放する。行くぞ！」

剣次はあたりの兵士たちをおこした風で吹き飛ばした。その時、赤の剣、青の剣、緑の剣が突然光りだした。すると、どんどんと剣のパワーが開放されていくことが持ち主たちは感じ取っていた。
「赤の剣と青の剣よ。剣に秘められし、力を解き放たん。いでよ、剣に宿りし精霊よ！」

「緑の剣よ。剣に秘められし、力を解き放たん。いでよ、剣に宿りし精霊よ！」

剣がさらに光る。それらのに彼らにはまぶしくない。他のものはまぶしがっているのに……。

「フレイムバースト！ アクアエンド！」

「スパイラルトルネード！」

剣に秘められた力が完全に放たれた！
その瞬間、剣の光が一気にあたりに世界中に放たれた。

エピソード

世界中へと広がっていった伝説の剣の光はやさしい光だった。光を受けたものは、やさしく包まれ戦闘心がブラックホールに吸い込まれていくような戦闘心を失った。

そして、ガイアマウンテンで争っていた兵士達にもその光はやさしく包み込み戦闘心を失わせた。

「一体なにが……？」

東軍兵士も西軍兵士も自分達の領土へと戻ってゆく。争うことをやめ、倒れているものには手をかし、命を失ったものは他のものたちが担いでつれて行く。

その光景に宮治だけではなく風紋、彩音、剣次も驚いていた。放たれた光に包まれただけで戦争が終結するとは思ひもしなかったのだろう。

剣次は驚きを解いて、つぶやいた。

「あの光が戦争を終結させる力か……。驚いたな。私が知っていた情報とは違う。しょせん、古代のものに対する情報は正確性がないということか」

「……」

宮治はだんまりだった。その宮治のところに、風紋と彩音がやってきた。

「どうやら、これで終結されたみたいね」

「ああ、そうだな」

「どうしたの宮治？ 元気がないけど……？」

「なんだか実感がわかなくてさ。本当にあれだけで戦争が終結されたなんて」

「それもそうだろう。私も実感がわかぬ。だが、あの光景を見ただろう？ 兵士達が手を取りあう光景を。そして、戦いをやめたこと。これだけで十分だろう」

それから彼らはそれぞれの故郷へと戻っていった。

彼らが別れてから数日内に東軍首相のラフラと西軍首相のガレフは平和条約を結び、今後、戦争をすることはないとした旨を全市町村に伝えた。その旨は別れた四人にも伝わった。

宮治はライトタウンに戻り、町の復旧活動始めた。ライトタウンにいた生き延びた人々はみなソードシティに行っていたため、宮治は予備にいき町の復旧を始めた。

人々は心よく町に戻って行った。宮治はソードシティの郊外にいった。あの老人に会うために。

だが、老人はそこにいなかった。街の人に聞いてもそんな老人は知らないの一点張りだった。宮治の心には不思議なことが残った。

風紋はランド山に戻り両親と再会した。その後、ランドタウンへと戻り、宮治と同じく町の復旧活動を開始した。

彩音はフラッシュシティで、愛している者の帰りを待った。何日も何日も。そして、ついに再会をした……。

宮治たちの心に謎を秘めたまま姿がなくなった剣次は、イーストシティへとやってきていた。その姿は宮治たちが知っている服装ではなく、剣も持っていない。

イーストシティで一番大きい家で剣次は生活を開始した。

三本の伝説の剣は今ももう彼らの誰も持っていない。静かに、剣の力が本当に利用される時までずっとハイブリッド神殿で眠っていることだろう。それから何千年とたっても剣は使われず次第にその存在は忘れていった。

かくして宮治たちの冒険は閉幕された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900e/>

戦争と剣

2010年10月8日15時50分発行